目　　次

特集「湯築城資料館企画展」講演記録
河野氏家臣団の群像　石野　弥栄　2
二神種範とその周辺　二神　英臣　8
「湯築城主河野氏を支えた家臣たち」展を終えて　溝田　直己　32
湯築城館長の Blog　石野　弥栄　35
シリーズ
系譜・家紋紹介　藤原半町二神氏　編　集　部　39
文書紹介
二神家外記　編　集　部　50
役員のつぶやき
畑中二神氏伝承　澤田　良子　二神　浩三　58
ペットで命びろい　二神　俊一　60
二神栄三氏を偲ぶ　二神　宏介　65
「えーちゃん」「まーちゃん」栄三氏を偲ぶ　二神　政幸　69
ＯＵＴ、ＩＮ　二神　重成　72
伊予吉田藩と忠臣蔵　二神　久蔵　74
一期一会　二神　亮郎　78
新米宮司奮闘中　二神　良昌　81
６年ぶりの二神島訪問　二神　康郎　85
二神豊田ご本家の位牌から　豊田　渉　87
「ふたがみ」にまつわる話
二神島の近況　編　集　部　90
むかし話し「お船にもうし」　編　集　部　92

会　　則 …… 94
役員名簿 …… 96
入会申込書 …… 97
編集後記 …… 98

企画展関連講演終わる

平成20年度湯築城資料館企画展

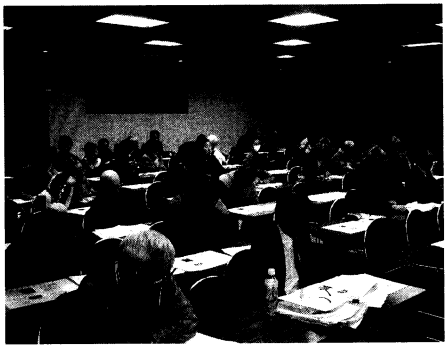
湯築城主河野氏を支えた家臣たち

二神英臣事務局長が
「二神通範とその周辺」と題して講演

河野氏の居城跡で国史跡に指定され、湯築城跡に建設されている湯築城資料館の平成20年度の企画展が、平成20年10月９日～11月30日まで開催されました。

今年度のテーマは「湯築城主河野氏を支えた家臣たち」で、多くの河野氏家臣団のなかで画像が残されている家臣の一つとして、二神氏が取りあげられました。企画展半ばの11月９日には「企画展関連講演会」が子規記念博物館で開催され、二神系譜研究会から二神英臣事務局長が講演を行いましたので、その内容を誌上で再現します。また、それに先だって湯築城資料館の石野弥栄館長が「河野氏家臣団の群像」の主題で講演された内容と併せて掲載します。

講演する二神英臣事務局長



講演会会場風景

特集「湯築城資料館企画展」講演記録

河野氏家臣団の群像
ー画像・古文書に見る家臣たちー

湯築城資料館館長　石野　弥栄

はじめに

愛媛県立道後公園内にある湯築城資料館では、本年度「湯築城主河野氏を支えた家臣たち」というテーマで企画展を開催し、先日閉幕いたしました。ここでは、戦国期に伊予国守護河野氏の権力を支えたさまざまな家臣たちの姿をビジュアルに伝える画像（肖像画）を中心に、それと関連する古文書や写真などを紹介いたしました。いうまでもなく、戦国期の河野氏家臣団の全体的な構成を知ることのできる確かな史料はありませんので、個々の家臣の姿を関連する断片的な史料を積み上げて描くよりほかにすべはないように思います。企画展を開催する準備の過程を通じて、河野氏が家臣たちをいかに掌握して領域支配を展開していったのか、その道筋について考えるとともに、彼らの特色を探ってみました。

【一】河野氏譜代の家臣団

湯築城主河野氏家臣団の中核をなしたのは、おそらく中世前期の河野氏武士団形成期以来の河野氏から分出した一族で、河野氏の郎党（郎従・所従・若党・下人等様々に表記された）であったものが、譜代家臣となったものでしょう。「予章記」には、「十八ケ村ハ是連枝ノ末葉」と見え、河野氏から分出した一族を「十八ケ村」という概念で

表現しています。なぜ氏族を村単位で表記したのか奇異な感じがしますし、いつごろそのような概念が成立したのか、あるいはそれらが実態を伝えているのか否か、等々問題があります。かつて、このような図式的な概念は、虚構のものとして歯牙にもかけなかったのですが、最近になって、熊野那智大社の御師潮崎氏の檀那目録（年未詳）に「河野氏ノー族十八ケ村」とか、「川野々一門十八ケ村々一族ケイツ書立有、代弐拾六貫文」とかあり、中世に熊野社の御師が檀那の権利を売買するときなどに河野氏一族の系図を利用していることなどから、確かにこの概念は存在するのではないかと思うようになりました。ともかく、「十八ケ村」の概念の起源、成立時期、構成メンバーの内容等はほとんど分かりません。また、戦国末期の湯築城河野通宣（左京大夫）や通直（牛福丸）時代の河野氏家臣団の構成を記した「河野分限録」（以下「分限録」と記す）という史料があります。それに記された「河野家十八将」という概念も、先の「十八ケ村」の概念を踏襲したものでしょう。しかし、これらの概念は、河野氏にとって重要ではありますが、当時の河野氏家臣団の実態をそのまま示したものとはいい難いので、ここでは、詳しく触れません。

室町期から戦国期にかけて、河野氏の命令を奉じて発給した文書に名を連ね（連署）、判（花押）を据えたのは、室町期には久万・垣生・目見田・大西・戒能・重見・正岡・中・栗上の諸氏であり、戦国期には南・町田・久枝・大野・枝松・垣生・村上（来島）・平岡等の諸氏（奉行人という）です。室町期と戦国期の河野氏奉行人のメンバーの顔ぶれはかなり違っていますが、その中核になるのは、やはり河野氏から分出したといわれる一族です。かれらは、文明13年（1481）の石手寺再興棟札に石手寺造営の各種奉行として登場している河野氏被官と同姓の者が少なくありませんから、その頃までに河野氏統治機構のメンバーは、ほぼ固定化したとみられます。今回の企画展では、中川親武と南通忠とを取り上げました。前者は戦国末期の天正年間には越智郡の霊仙山城主であり、その画像賛（今治市円久寺蔵）からする

と、天正５年（1577）に死去したといいます。中川氏はもともと風早郡に発生した武士らしく、文明18年（1486）の「宗昌寺領坪付」には、風早郡内の河野氏給人として見えます。一説には河野氏流寺町氏から分派したともいい、応仁の乱の頃には河野教通の奉行人として在京していたふしがあります。戦国末期には府中防衛の拠点の一つ、霊仙山城の城督（城将。寄親か）として配置されたとみられ、その城を守備する「宮ケ崎衆」という与力衆とみられる武士集団を編成したのでしょう。風早郡の南氏も中川氏と同様に、湯築城背後を防衛する重要拠点、横山城の城将として多くの「御旗本組衆」（与力衆）を従属させていたといいます（「分限録」）。その昔捏寺である雲門寺に伝わる木像は、天正８年（1580）に通忠の供養のために善応寺僧が造立したといわれています。

【二】河野氏一門の創出

戦国末期には、古くからの河野氏一族にかわって新しい河野氏一族が創出されました。これを河野氏一門と呼び、従来の河野氏一族と区別します。その代表的なものが、越智郡の来島城主村上通康と周敷郡の剣山城主黒川通博です。いずれも河野弾正少弼通直の女婿となり、河野氏の東予地域支配の抑えとして重要な役割を果たしたとみられます。前者は毛利氏とも姻戚関係を結び、河野氏と一体化して伊予国統治に関与しました。さらに南予（愛媛県の南部）で発生した永禄年間の鳥坂合戦には、病をおして自ら河野軍の主力として出兵し、その一族村上吉継は鳥坂城に籠って目覚ましい活躍をしています。しかし、その後継者村上通総は、河野・毛利氏に背いて織田信長と結び、信長の部将羽柴秀吉の毛利氏攻めの後方支援をしました。かれは、伊予国内で河野氏の拠点を次々に攻略し、河野氏を支援する毛利軍とも交戦しました。本企画展では、村上通康・通総父子の画像を紹介するとともに、その関連文書を展示しました。

一方、黒川氏は河野氏一族とも、土佐国の長宗我部氏が養子となっ

て後継者ともなったという説がありましが、どうでしょうか。私見では、黒川氏は来島村上氏と同様に血筋の上では河野氏と結びつきのなかったものの、勢力強大化しつつあったので、河野氏が政略結婚を通じて河野氏一門の列に加えたと解したほうが、無理がないように思います。黒川通尭、通博父子は高野山参詣をしたとき、河野氏と同じように、上蔵院を宿坊としただけではなく、河野氏の命令を受けて、領内の武士・庶民にも上蔵院を宿坊とするように命令を下しています。他の河野氏家臣は、このような命令を出していないことからも、河野氏家中における黒川氏の位置の高さをうかがうことができます。なお、余談になりますが、企画展で紹介した来島村上通康の画像に見えるその衣装（大紋）の家紋は、河野氏の家紋と同じ三つ鱗ですし、黒川氏も河野氏と同じ折敷三文字紋や三つ鱗を家紋にしたといいます。ここに河野氏一門視された両氏の立場が如実に反映しているのではないでしょうか。

【三】河野氏直属水軍化した二神氏

戦国期の瀬戸内海の海賊衆は、来島村上氏が河野氏一門として河野氏と一体化して、その軍事力の主柱となりましたが、一方、芸予諸島の能島城、務司城、中途城などの海城を拠点として勢力を拡大化した能島村上氏は、河野氏を主家と仰ぐものの、完全に家臣としての態度を示していません。村上武吉、元吉父子らの実名は、河野氏ゆかりの「通」の字を付していませんし、中国地方の大半を平定する勢いを示す毛利氏と軍事同盟を結び、むしろ毛利氏家臣としての動きを見せています。

河野氏は湯築城のフロンティアを防衛するために、二神島に発生した二神氏一族に風早郡・和気郡等の内陸部に多くの給地を与え、かつ風早郡と和気郡の境の宅並城という海城を二神氏に防衛させました。この城を守る武士集団を「宅並衆」と呼びます。とくに二神隼人佐通範は、「河野分限録」では、得居氏（河野氏一族。のち来島村上氏の

通之が養嗣子となる）の配下の御旗本組衆にすぎませんが、河野氏から直接所領の安堵を受けるなど、当初は来島村上氏に従属する武士ではないでしょう。本企画展では、この通範とその妻の両者を描いた珍しい画像を展示しました（34ページ写真参照）。これは戦国の世が終り、近世になってからの制作にかかるものではありますが、戦国武将やその妻の面影を偲ぶことのできるものとして貴重です。

【四】外様家臣の起用

「分限録」の写本の中に、「外様諸郡旗頭衆」として浮穴郡の大野氏、宇和郡の西園寺氏とその御旗本組衆を始めとする諸領主、喜多郡の南方殿摂津氏、萩森殿宇都宮氏、新居・宇摩郡衆として金子・石川両氏とその配下の領主たちを河野氏配下の旗頭として記しているものがありますが、これらは本来「分限録」にあった記述ではなく、のちに付加されたものと考えられますし、河野氏が戦国期に南予２郡、東予２郡を支配下に置いたというのは、実態を示したものではないでしょう。ただ、浮穴郡の大野氏（大除城主）と平岡氏（荏原城主）は、いずれも河野氏から派生した領主ではありませんが、戦国末期には河野氏家中で重きをなしたのです。前者は河野氏の官僚に加えられていますし、後者は永禄年間（1558～1570）には、浮穴郡のみならず伊予郡にも影響力を及ぼし、南予の鳥坂合戦等の戦乱には来島村上通康とともに、河野軍の大将として出陣しています。大野氏は鎌倉期に三河国から伊予国へ移住してきて、勢力拡大をとげた領主と推測されますし、平岡氏は、河野氏滅亡後、房実が萩藩毛利氏に仕えて、河野氏から出たという系譜を提出していますが、彼は高野山上蔵院の「河野家過去帳」では橘姓を称していますから問題ですね。この両氏に共通するのは、鎌倉期以来、浮穴郡の荏原郷・久万山・林（拝志）郷を所領とした美濃土岐氏の基盤を侵略して奪い取ったことです。本企画展では、平岡房実とその子息通資が連署して伊予稲荷社の神官の領地を安堵した文書を紹介しました。

【五】河野氏御用商人化した（？）武井（武任）氏

河野氏家臣のなかで異色の存在は武井氏です。武井氏は、その系譜によりますと、鎌倉期に元寇で活躍した河野通有から分かれた河野一族といわれています。風早郡の武任（武任名か）に発生したといい、武任氏と名乗りました。たしかに戦国末期の天文11年（1542）に武任又五郎（通親）は、河野晴通から「武任分」を安堵されていますから、名字発生地（本貫地）を後々までも持ち続けたことが分かります。この文書は本企画展で展示しました。ただ、武井氏を単なる河野氏譜代家臣として位置づけるだけでは不十分だと思います。武井氏は、河野氏滅亡後、福島正則、戸田勝隆、加藤嘉明らの豊臣大名に次々と仕えて、各大名の形成した城下町の町場に住み、商人的性格をもっていたことが、その伝来文書からうかがい知られます。慶長５年（1605）９月15日の関ケ原合戦が行われた日に、西軍方の毛利氏の部将宍戸景世と能島村上武吉、元吉父子が連署して、東軍方に加担して関ケ原合戦に参陣した加藤嘉明の留守をねらって松前城下に住む武井宗意と宮内休意に味方になるように働きかけた文書がありますが（「村上水軍博物館所蔵文書」）、それは武井氏の性格の一端を示していると思います（本企画展で写真パネルとして紹介）。実は武井氏のこのような性格は、河野氏が湯築城主であったころに培われたものと考えます。河野通宣（左京大夫）の書状（消息）には、武井又五郎（通親）が湯築城下とみられる町場の住人に人気が高く、伊予の三津・堀江港から安芸国宮島へ渡る船にも乗船したことが読みとれます。この文書に見える又五郎通親のころに武任から武井へと改姓して、河野氏の御用商人化したのではないでしょうか。その詳細は、別の機会に検討したいと思います。

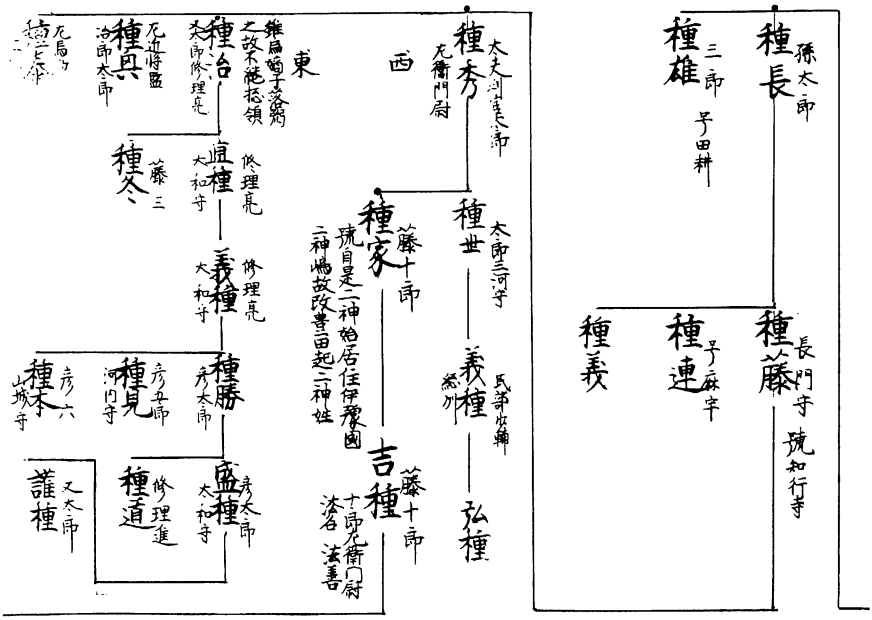
特集「湯築城資料館企画展」講演記録

二神通範とその周辺

二神　英臣

1．はじめに……二神氏について

二神氏は古くから二神島に定着した開発領主ではありません。その点は中島の開発領主であった忽郡氏の立場と全く異なっています。二神島宗家二神氏伝来の「豊田二神嫡流系図写」によりますと、藤原隆家の嫡流と伝えられ、四代のちの



「豊田二神嫡流系図写」の一部

輔平のころに姓を豊田と呼び長門国豊田郡（現在は下関市豊田町）に居住し、自ら大領主と称していました。

この豊田氏系譜の鎌倉末期に種家（藤十郎）という人物があり、父種秀の没後、兄種世との間において家督相続の紛争が起こり弟の種家は故郷を離れなければならなくなりました。（「二神氏系図伝書略記」＝片山二神氏伝来）

種家が本拠を二神島に移した時期については明確ではありませんが、二神島安養寺に現存する「大般若経」の奥書によって類推しますと、室町時代初期であったと考えられます。したがって、兄の種世の系統は豊田郡に残り、種家の一族のものが二神島に移り二神氏を名乗り、次第に島民との関係を深めていったものと見られます。

種家のあとを継いだ吉種は、元徳年間から貞和年間（1329～1350）にかけて活動した人物で、藤十郎・十郎左衛門尉といい、法名を法善と称しましたが二神島の八幡神社に大般若経を奉納したことは、安養寺に現存する経巻の奥書によって明らかです。

吉種の後を継いだ3代目種直の時代になって、ようやく二神氏もその名を知られるようになりました。種直は十郎左衛門尉、修理進、法名を光善と呼ばれていました。（「二神氏系図伝書略記」）

2．河野氏家臣、二神氏とその時代

二神氏が河野氏の家臣となったのは3代目の二神種直の時代からで「予陽河野家譜」にもその名が現れるようになりました。

「二神氏系図伝書略記」によりますと、伊予国守護職の河野通朝が貞治3（1364＝南朝正平19）年11月に細川勢の攻撃をうけて世田山城に戦死し、その子の通尭が難を九州地方に避けた時、勧誘されてその部下となり、行動をともにしたと伝えられ、ここに将来にわたり河野氏との密接不離な関係が生ずることになりました。「予陽河野家譜」によりますと、二神十郎左衛門尉種直は村上義弘、今岡通任らの部将とともに、伊予国沿岸の制海権の維持に努力し、また通尭の九州から

の帰国に際して、これを迎えるために屋代島まで軍兵を派遣しています。ただ残念なのは、これらの史実を傍証する史料のないことです。

「二神氏系図伝書略記」には、正平22（1367）年に河野通尭が細川氏の勢力を追払って伊予国の権勢を回復した時、これらの戦功によって風早郡の領地を給与され、本拠を同郡宅並城（現在の松山市小川）に移した旨を述べています。これから二神氏は二神島ばかりでなく、伊予本土の風早郡に拠って活動し、後には河野氏の重臣としての地位を維持するようになりました。（『二神家文書』・景浦勉著より）

この種直の後を継いだのは、その子の家直であって、四郎左衛門尉（法名は祥因）といい、「二神氏系図伝書略記」によれば引き続き風早郡宅並城に拠り、在地勢力としての形態を保持していたと考えられます。この頃すでに、忽那氏は昔日の姿を失っていたので、二神氏は自由に活動する機会に恵まれていたと考えられます。

河野氏家臣としての二神氏は種直－家直－家真－種－通範と継承されてゆきますが、「種」の系図伝書略記の項に「寛正六年九月六日豫州道後討死勝元感状之有」と記載されています。

当時河野氏が宗家と予州家とに分裂して抗争を続けていましたが、寛正５年（1464）になって阿波・讃岐に勢力を持っていた細川氏の兵が河野通春と衝突し、幕府側は細川氏援護のために周防国の大内教弘に出兵を要請します。教弘は幕府の命に従わず河野氏側を支援する事件が起こりました。この事件に関連して、二神種はどのような理由なのか不明ですが細川氏側を支援して戦に参加、結果的に河野氏側と戦を交え寛正６年（1465）９月６日に道後湯築城の戦いで討ち死にし、後に細川勝元から感状を与えられています。種の系図伝書略記の内容について「系図中の記事は、かなり検討を要しますが、二神氏にとって必ずしも有利ではない細川氏のことを書き留めているのは、かえって信用に足るものです」（「河野氏の時代と二神氏」・石野弥栄）との見解も出されています。

いっぽう中央政界においては応仁・文明の大乱（1467～1477）がお

こり、諸国の守護をはじめ武士たちも、東軍の細川勝元と西軍の山名宗全のどちらかに属し、自分の勢力の拡大をはかります。通説に従うと、河野教通は大内義弘とともに西軍に呼応し、上洛して活躍しました。

■二神文書

これまで二神文書と呼ばれてきたものは、系図と併せて伝わってきた書物がほとんどです。

第一に二神島の宗家二神氏に伝わる「本島二神氏文書」41通は現在、神奈川大学日本常民文化研究所で調査中です。

第二の「片山二神氏文書」13通は原本が昭和20年の松山空襲で焼失しましたが、それまでに取材していた影写本が東大史料編纂所に、写本が伊予史談会に残されています。

第三に「柳原二神氏文書」の写し5通が畑中二神氏に伝わっています。

この他、「吉木二神氏文書」は影写本が東大史料編纂所に残されていますが、大分市の「林二神氏」に伝わってきた「豊後森二神氏文書」19通、現在その所在が調査中で、未確認となっています。また、近世になってからのものでは「御荘二神氏文書」「余戸二神氏文書」「小才角二神氏文書」などがありますが調査は進んでいません。

■二神系図

一方、これまでに確認されている二神氏系図には大きく分けて三系統があります。第一には二神島の宗家二神氏に伝わる「本島二神氏系図」（豊田二神嫡流系図写）、第二には「片山二神氏系図」（二神氏系図伝書略記）第三には「柳原二神氏系図」（土居二神氏系図）ですが、これらは豊田氏を名乗っていた時代から中世の終わりまでは、一部を除いて基本的にはほぼ同じ内容になっています。

近世になり藩体制が確立するなかで、それぞれの地域の二神氏に

「二神氏系図」が残されています。主な物として「吉木二神氏系図」「御荘二神氏系図」「余戸二神氏系図」「豊後森二神氏系図」「小才角二神氏系図」などがあります。内容的の検討や文書との照合が必要なものが、未確認の系図も含めてまだまだ残されていますので、二神系譜研究会に課せられた調査研究の課題は大きいものがあります。

これらの文書や系図について「二神諸家の系図を見て気づくことは系図が伝える系譜の世界と、文書が示す系譜の世界が余りにも大きく乖離していることである」(「伊予二神氏と二神文書」福川一徳) とか「二神系譜の記述が本系のみに限定せられ、かつ余りに簡単であるから古文書の上に現れる重要な人物を系譜の中に発見できないことである」(「二神家文書」景浦勉) との共通した見解がこれまで歴史家によって述べられていることから、新たな二神文書や系図の発見が待たれるところです。

一方、系図のみで、文書が付随していないのは「得能二神氏系図」(得能利国氏所有) ですが、その理由について二神系譜研究会顧問の福川一徳氏は論文「伊予二神氏と二神文書」(『四国中世史研究』第6号)の中で述べられているので参考にしてみてください。

3．二神通範の周辺

■通範、名前の由来

二神通範の名前に「通」を使用していますが、これは「二神氏系図伝書略記」に「此二字河野後自善応寺殿賜之」と記載されているように、「後善応寺殿」つまり河野教通から贈られたことが判ります。そして「通範」つまりその意味の示すところは通＝河野氏、範＝てほん、英範、規範、模範のことから、河野氏の家臣のなかで重きをなす位置に二神氏を置いていたことが伺えます。

既にこの時代には、二神氏の中でも河野氏に背いた来島通康と行動を共にしていた二神氏がいたことが確認されていますから、それに対する牽制的な意味もあったのではないかとも考えられます。

二神通範　幼名三郎　官職名隼人佐

生年不詳～1616年（元和２年）７月15日没。戒名　樹枝道種居士　河野氏の菩提寺善応寺で供養。通範の200回忌は1816年（文化１年）。400回忌は2016年（平成28年）に催される。

二神通範は二神氏初代の種家から７代目に当たり、二神氏の遠祖と伝えられる藤原道隆から数えて24代目になり、二神島に残る宗家二神氏墓地の歴代人物の墓石では藤原氏から数えた表現になっている。二神氏歴代のなかで「中興の祖」と呼ばれ、中世と近世を繋ぐ時代を生き抜いたのがこの二神通範で、いわば河野氏の家臣として仕えた二神氏のなかで最後の人物である。

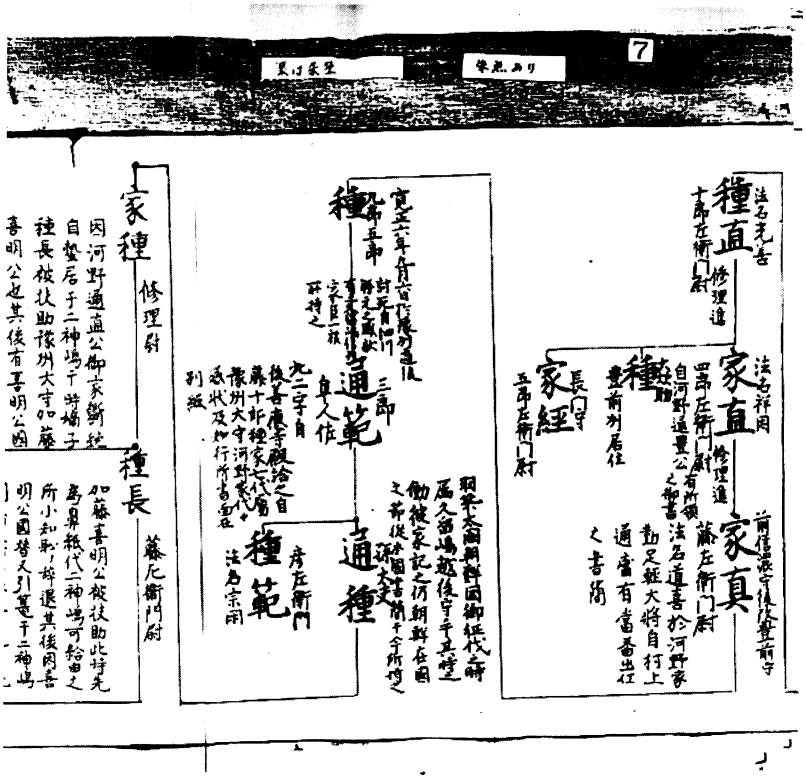
「二神氏系図伝書略記」に記載された通範の項目には「此二字河野後自善応寺殿賜之……（後略）」と記載されているように通範の二字は湯築城主、河野教通から付与されたものであることが明確に書かれており、歴代二神氏の中で最も河野氏との関係が深い人物である。元亀、天正年間の各地の戦いに参加し、豊臣秀吉による四国平定に際しては風早郡の高穴城を死守して河野氏を支えた。湯築城最後の城主であった河野通直が安芸国竹原で没した後、出家してその菩提を弔っていたのが二神通範であったことが判明している。

二神通範は二神氏の軍事集団とも云える宅並二神衆を組織しながら元亀、天正年間の各地の戦いに参加し、河野氏の家臣として水軍勢力の任務を果たした。一方通範は「二神氏系図」を作成する際に伝来の二神氏系図に「豊田二神隼人佐藤原道範系図」（「道範」は、原文のまま）と銘打ち、五摂家のうち一条、鷹司、近衛の三家に書を送り藤原氏の嫡流系図を給わるなど、軍事力だけでなく政治的な足跡も残している。

二神氏の系譜のなかで、代々名前に付与する通字は「種」ですが、河野氏の通字である「通」を付けているのは通範と嫡子の通種だけです。江戸初期に作成され、片山二神氏宗家に伝わる「二神氏系図伝書略記」に記載された通範の項には「此の二字河野後自善応寺殿賜之自藤十郎種家七代属豫州大守河野家代々感状及知行所之書面在別紙又九

郎五郎討死豊前守家督隼人佐可相続之旨自河野通直公藤左衛門エ之御教書有之」（通範と云う二つの文字は、先々代の主君河野教通公から賜ったもので、二神の始祖藤十郎種家より七代に渡って、伊豫の頭領河野家に仕え、代々貰った感状や知行の書面は別紙として残して在り、又、先代の九郎五郎戦死に際し、河野通直公から祖父豊前守家真に対し、家督は隼人佐通範に相続させよ。との藤左衛門宛の直状がある）と通範のことを記述しています。

伝書略記の表現では「種家より七代に亘って」とありますが、文書類からの考察では３代目種直の時代から河野氏家臣としての動きを示しているので、この部分の検証も必要です。



通範の事を記した「豊田二神嫡流系図写」

■通範関係文書

さて、その通範が生き抜いた時代を文書類の中から追ってみます。二神島本島宗家文書には通範宛の文書は残されていません。片山二神文書には天文15年（1546）7月発給の河野通直安堵半物、弘治3年（1557）8月発給の村上通康書状、これは通範と宅並二神衆中宛の連名ですが、それに永禄13年（1570）12月発給の河野通直安堵半物、の3通が残されています。

通範の没年月日が元和2年（1616）7月15日。最も古い通範宛の文書発給年代である天文15年（1546）7月時点で、仮に元服年の15歳と仮定して計算してみますと約85歳前後で没したことになり、当時としては凄い長寿をしたことになります。しかし、先に述べた系図上父の立場の種が道後湯築城の戦いで討ち死にした寛正6年（1465）の事件から、通範の没した元和まで約150年間の時間差があり、家真から種－通範までの三代の治世年は、これまで数名の二神氏の研究者によって指摘されているように検証が必要となっています。

■通範の戦歴

元亀3年7月「毛利勢の来島恵良城奪取事件」

二神通範は河野氏の家臣として二神衆を組織し、他の家臣団とともに伊豫国各地に転戦しています。それらの中で広く知られているのが毛利勢の来島恵良城奪取事件ですが「予陽河野家譜」によると、元亀3（1572）年7月に毛利氏の軍が大挙して、伊予郡松前・和気郡三津・風早郡北条の三方面から侵入しました。三津方面では忽那通著・垣生盛周らが侵入軍を撃退したけれども、風早郡では重見・二神・高田氏らの守備した恵良城を奪取されます。毛利氏の軍はこの城を拠点として松前上陸軍と呼応し河野氏の本拠の湯築城をうかがうありさまでした。河野氏は南予の土居清良・南方親安らの来援と、大野直昌・平岡通倚・土居通建らの家臣団の奮闘によって、松前上陸軍を撃退することができました。さらに忽那・二神・佐伯氏らの軍は恵良城を奪還

したので毛利氏の軍は目的を達成しないで敗走しました。(『二神家文書』・景浦勉著より)

元亀3年9月「阿波国三好氏の伊予国侵入事件」

引き続き同年9月に織田信長に支持され恵良城に攻め込んだ阿波国三好氏に対し二神通範は二神衆を組織し、恵良城主得居通久を先頭に反撃した戦いがあります。阿波国の三好氏が新居郡の石川通清と提携して、東予および中予地区に進撃しました。この時の戦闘は川之江城・高尾城・鷺森城・西条、あるいは恵良城・和気郡蔦籠屑城・三津の各地区で展開され、二神通範(隼人佐)は大野直昌・土居清良・重見孫四郎らと中予の各地に転戦して、侵入軍を撃退することに成功しました。

これらの記事は「予陽河野家譜」等の郷土史料のみにあって、他に傍証することができません。これらのうちでも毛利氏との問題点については、「萩藩閥閲録」等の毛利氏関係文書によると、能島の村上氏をめぐって紛争がおこっているから、これと関係のある事件とも思われますが、これらの詳細については今後の研究に待たなければなりません。(『二神家文書』・景浦勉著より)

天正元年3月「大洲地蔵が嶽城への出陣」

「年号が天正と改まった頃、政界の動揺の激しくなるにしたがい、喜多郡の大野直之(直昌の弟)は土佐の長曽我部元親に通じて、天正元年(1573)3月に河野氏に反抗した。通範は河野氏の命に従って討伐軍に加わり、その根拠地の地蔵ヶ嶽城をおとしいれたが、直之は逃れて鴇森城に拠った。しかし、独力で抵抗できないのを察して元親の援助を求めた。この時二神越後守は諸軍に率先して、この城の攻撃にあたり、有名を知られた」(『二神家文書』・景浦勉著より)

「天正元年3月18日、喜多郡地蔵嶽城を根城とする大野直之が土州の長曽我部元親に志を通じ湯築城の河野氏に背いたのでこれを誅罰す

る事になり、池原通告を総指揮に五千余騎を従えて喜多郡に進発し、二神通範は二神孫右衛門、二神越後守とともに風早衆得居組として参加し翌19日、前夜からの大雨で水量の増した肱川の水嵩を測るべく川中で作業中に敵の矢玉が乗馬に命中、下流に流されてゆくうちにやっと一族郎党に助けられる」(『予陽河野家譜』)」

その時の場面については、次の様に描かれています「そこで午前七時から二神隼人佐、高松美濃守、中石見守ら馬を濁流に乗り入れた。敵兵はこれを見て一斉に矢玉を発したので何条もってたまるべき、隼人佐と石見守の乗っていた馬に矢玉が命中したので次第に下流に流されてゆく、石見守は水底に沈んで既に溺死の寸前に至ったそこで腰の刀をぬいて甲ノ上帯小具足を切りやや暫らくして浅瀬に浮き上ってきた、そこでやっと一族郎党に助けられた」(『河野氏盛衰物語』・玉井豊著より)

通範、河野氏の使者として安芸国毛利氏に援軍を請う

一方、河野氏側では長曽我部元親の軍に対抗するために、毛利氏に援助を依頼することになり、二神通範が選ばれて使者となり安芸国に赴きます。やがて大野直之は河野氏与党の総攻撃に破れて降伏したので、この騒乱もいったん平定しました。(『二神家文書』・景浦勉著より)

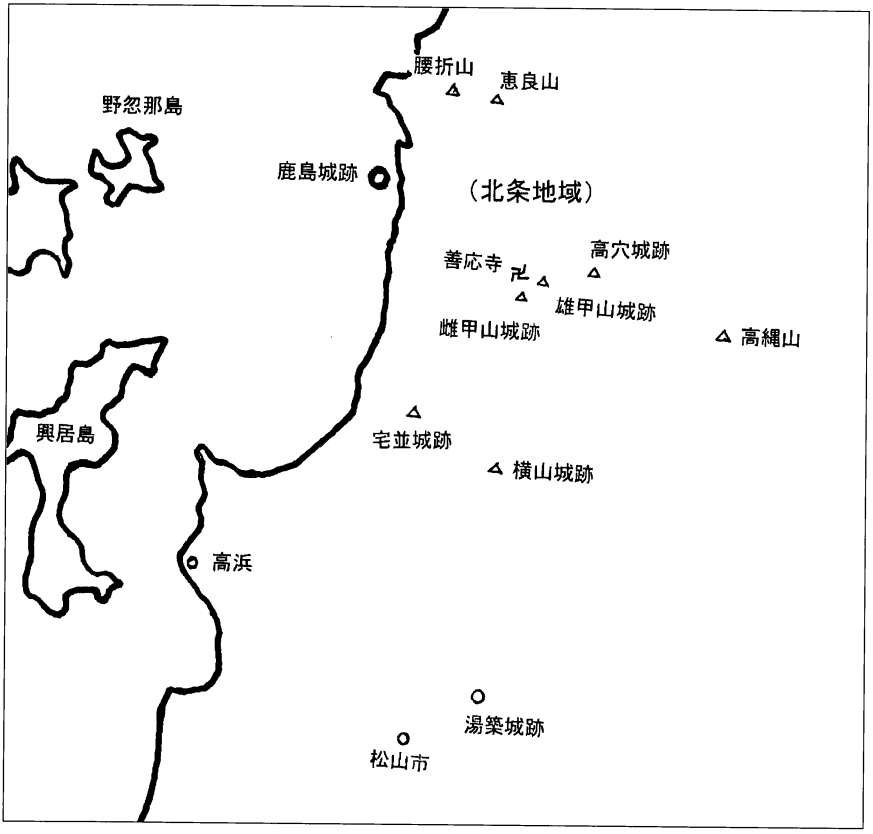
結局、この戦は長曽我部元親に援軍を求めた大野直之に対し、河野氏側の総指揮池原通告は二神通範を使者として安芸の毛利氏に事情を訴え援軍を請うた。結果、小早川隆景を先頭に援軍約1万騎が長浜に上陸したため、大野直之は降参し事件は落着しました。

天正13年高穴城での攻防戦…小早川隆景の伊予征服湯築城の開城

天正13(1585)年に豊臣秀吉の命をうけた小早川隆景が、河野氏征伐のために伊予に進撃した時、二神通範は風早郡の高穴山城によって抗戦したが、ついに陥落の悲運に遭いました。この時来島通総は小早川勢に応じて攻撃軍に加わっている関係から、これに従属した二神勢

もありました。後に来島康親の家老として豊後森に移った柳原二神氏系譜の一流です。

「河野通直は温泉・伊予・浮穴の諸郡の城塞の兵を湯築城に集めて、最終の抗戦を試みた。隆景は城を包囲するとともに、書を通直に送って帰順をすすめました。その結果、通直は大勢を察知し、城を開いて隆景に降伏しました。時に同年9月のことであって、秀吉は河野氏の所領を没収し、隆景が伊予35万石の大名に封ぜられたので、伊予国は完全に秀吉の統一政権に握られることになりました」(『二神家文書』・景浦勉著より)



河野氏関連城跡略図

この時の高穴城の場面については

「寄手は遂に風早郡に入り、隆景は伊予軍である来島通総、得居通久らに中国兵500騎を加えて立岩の日高山城を攻めた。城主重見孫四郎通晴及び家臣一徳右馬允ら兵を励ましてよく戦い、敵の戦死者既に五十余人に達した。通晴は屈強の若者七十余人を率いて大手から走り出て槍を揮って奮戦数回に及んだが遂に戦死した。その子は幼少であったので、殺されるのを免れて母と共に立岩の小山田に住んだ」

「隆景は更に桂左衛門大夫その他をして高穴山城を攻撃せしめた。この城は二神一族並に宇佐美、目見田、尾越以下難波衆が相集つて守る処である。元来この城は山高く谷深く四方険峻であって、中国の諸将は谷を隔てて西北の峰に陣をとって連日戦ったが落城しない。隆景は大いに怒って自ら兵を進め、険涯をよぢ登つて戦い、遂に外廓を攻め破った。城中騒いで防戦に躍起となったが適わず遂に逃亡したが討たるる者百余人に達した。隆景は更に鹿島城を攻め落し、善応寺城を攻撃した。隆景は又々軍備を整えて得居、来島を先鋒として横山城に向った。この城は山岳殆んど孤立して、石階を畳むが如く、城壁天に聳えて要害堅固である。こうした自然の要害に背面の山続きの陵線は鋸型に人工を加えて築城している」(『河野氏盛衰物語』・玉井豊著より)

隆景はこの後、横山城主の南彦四部通具を破って8月29日には道後平野に入り、湯築城の攻略にかかってゆくことになります。河野通直は、小早川隆景の進言を受け入れて恭順したため、湯築城での激しい戦闘は展開されませんでした。しかしそれまでの、周布、桑村、越智、野間、風早郡の各城での戦いは相当の死者も出る激しい戦いになりました。

二神通範が高穴城での戦いのあと湯築城で恭順した主君の河野通直が安芸国竹原の長生寺に移り、亡くなった後に出家し、66年間その菩提を弔って年忌供養を続けていました。(詳しくは後述)

二神氏に三つの流れが存在

石野弥栄氏はかつて記念講演のなかで、「二神氏における〈衆〉の形成と役割」との項目を立てて「宅並二神衆」について次のように述べています。

「二神氏は風早郡で多くの領地や強力な権限を与えられていましたが、もう少し注目すべき点は、二神氏において「衆」が形成されていることです」と述べ、永禄13年（1570）来島通康の死後、来島氏の当主となった牛福丸（後の通直）が室町幕府に背いたため河野氏は二神氏に来島牛福丸への対面禁止、風早郡における新領地の給与の約束を命じました。このとき、河野氏から二神氏へ発した命令文書が二神修理進、二神隼人佐、宅並衆中の三者に宛てられていることに注目をしています。

これまでに明らかにされてきましたように、二神修理進は後に来島氏と行動を共にし、豊後森へ移っていった人物の系譜。隼人佐は善応寺で絵図が発見された二神通範。そして宅並衆中とは、和気郡と風早郡の境目付近の海辺部にあった宅並城を防衛する二神氏の集団で、宅並城の麓の小川村を中心に、磯之河、粟井川流域の安岡、友兼、宮崎にかけ、海浜部はもとより、横山城や湯築城の背後に続く陸の要衝を守る役割を持っていた集団のことで「宅並二神衆」と呼ばれていました。

そして二神諸氏に命令が下された直後、河野氏は、二神隼人佐、二神修理進にそれぞれ同文の命令書を出して粟井内の領地を安堵しています。それには「衆中可申談也」との文言が付されてあり、二神各氏と宅並衆とが申し合わせを行い、一族が結束して対応している様子が読み取れます。

なお、詳しくは二神系譜研究会発行の『海の民・ふたがみ』第３号を参照してください。

宅並二神衆――通範の活動を支えた二神水軍の実働部隊

二神氏の三つの流れの一つ「宅並二神衆」は二神氏系譜の中で軍事

部門を中心に、平時にあっては二神島で習得した漁業や、一族が生き抜くため農業、林業、造船、土木などの総合的な知識、技術を持った軍事的知識集団であったことが想定され、いわゆる二神水軍の実働部隊だったと云えますが、実体は不明のままです。

愛媛県歴史文化博物館の石野弥栄氏（当時）は、この「宅並二神衆」について「和気郡と風早郡との境目付近の海辺部にあった宅並城を防衛する二神氏の集団」（「河野氏の時代と二神氏」記念講演記録より）、「二神氏は粟井郷内の所領を相伝し粟井郷反役職、河野郷役職に補任され、河野氏家臣団の中で重きをなすようになった。そして風早郡の宅並城に拠って宅並二神衆を形成し、河野氏の軍事力（水軍）の一翼をになった」（『愛媛県史、古代・中世』昭和59年愛媛県発行）と述べています。

宅並二神衆と見られる墓石群（松山市小川）

「地域毎に二神島衆、宅並二神衆を形成し一族内、地域内の問題は衆中の談合によって決した。永禄期からは左馬助、修理進家、弥五郎家、がそれぞれ二神島衆、宅並二神衆の盟主的な存在になっていたのである」（「伊予二神氏と二神文書」福川一徳著）との見解も出されています。

難波二神衆

二神隼人介・二神孫右衛門尉・二神新右衛門尉・二神修理亮尉・二神和泉守は「河野分限録」に出てくるこれら５人の二神氏のことを指すものと考えられますが、難波二神衆についての具体的な活動についての記録は残されていません。二神隼人介は通範の事と思われますが、５人の今日に繋がる系譜については、一定の範囲で確定されているものの調査はこれからです。

■菩提寺・過去帳

二神通範夫妻を追善供養したのは臨済宗善応寺ですが、河野氏滅亡後の善応寺は衰退し、その後約百年間は無住職の時代があったと云われます。通範を弔ったのは善応寺であったと見られますが、これまでのところ通範の過去帳などは善応寺からは発見されていません。これまでに確認されたところでは、善応寺の過去帳に残っているのは「余戸二神氏系譜」の江戸時代元禄期から幕末までの過去帳で、他の二神氏の過去帳は残されていません。しかし、柳原二神氏系譜直系で、幕末の風早俳壇の重鎮であった二神栗舎（ふたがみくりや・本名種亮）が「河野の善応寺に葬る」との記述（『伊豫史談・第11巻第３号・大正13年12月12月30日発行』があり、葬儀、供養の証明でもある過去帳の発見が求められています。

菩提寺との関係で云えば、天正13年、河野氏滅亡後善応寺は衰退し無住職時代に入っていましたが、その時代に亡くなった二神氏はどこの寺社で供養されていたのかが改めて問われています。高穴城での攻防戦後、秀吉の時代に入ってゆきますが、通範の子である通種、種範兄弟は文禄・慶長の役に来島通総の指揮下で出陣します。帰国後、風早二神氏の祖となった二神種範（長慶院宗関信士）は慶安３年10月８日に没しますが、供養されたのは当時無住職であった臨済宗善応寺ではなく日蓮宗法善寺でした。

この間にどのような事情があったのかについて調査を進めたところ、日蓮宗本妙山法善寺を開祖したのが本妙院日法上人で、同寺の由来によれば「天文20（1551）年長門国の領主第31代大内義隆公は家臣陶隆房（後に晴賢）の謀反により９月１日長門湯本の大寧寺にて45歳の若さにて自刃す。次男の幾代丸君は御歳七歳にして伊予国風早の地に落ち延びて、北条にて酒造を営むに至り、屋号を布屋と称し、姓を豊田・幾之進本義と改める。大内義隆公（常信院殿法壽日劔大居士）の菩提と布屋豊田家の繁栄を祈り、開山本妙院日法上人を招いて元亀元年（1570）年２月15日上難波の寺之谷の地に当法華寺を創立」とあります。

さらに調査を進めると大内義隆公夫人、つまり幾代丸の母は長門国豊田氏の出自であることが判明しました。そこで、「大内氏が滅亡した後、幾代丸が残党狩りを逃れわざわざ遠方の伊予国風早郡北条の地に赴いたのは母方の系譜である二神氏を頼ってのことではなかったのか」との推測が成り立ちます。大内氏滅亡後から15年後に河野氏も滅び、善応寺が衰退した同時期に二神氏が菩提寺として法善寺を選んだ理由がそこに浮かんでくるようです。なお法善寺には、二神種範をはじめ臨済宗善応寺に先代から伝わっていた二神通範夫妻の絵図を通範の200回忌のその日に当たる文化12年（1815）7月15日に修復し追善供養した二神種方（諦鏡院高道日融居士・嘉永元年（1848）8月3日没）の過去帳も他の一族と共にまつられています。

■墓地

二神通範と夫人の墓石（五輪塔）は、河野郷の片山墓地で確認されています。二神通範夫妻の絵図の発見は、夫妻の墓石の発見へと広がりを見せてゆきました。

「二神通範（樹枝道種居士）と夫人（仙窓理心大姉）の墓石を確認
　風早二神氏の祖種範の墓石、過去帳も発見」

河野氏滅亡後も風早郡に留まった通範でしたが、これまでのところ、菩提寺、過去帳、墓石等については何一つとして確認されていませんでした。善応寺で「供養絵図」が発見されたことによって当初の菩提寺は善応寺であることが確認されましたが、過去帳は同寺では今までのところ見つかっていません。「河野氏の滅亡とともに同氏の菩提寺だった善応寺も荒れるに任せられ、

通範夫人の墓

二神通範の墓

その後、約百年のあいだ無住職の時代となりました。このため、寺宝や過去帳など重要なものが、この間に逸敬してしまいました。」（善応寺　高縄文昭住職）と云われるように二神氏と密接な関係にあった善応寺に二神氏関係のものはこれまでのところ余り見つかっておりません。その意味でも絵図の発見は素晴らしいものだったと云えます。

「風早二神氏は元来はおそらく善応寺の檀家だったのでしょうが、近世初頭、善応寺が衰退した時期に、二神氏はみな法善寺に移籍したのでしょう。」（福川一徳法大講師）。この福川先生の説を裏付けるように、1999年２月15日に北条市の片山基地で調査を進めていた北条ふるさと館の竹田館長（当時）から連絡が入り「片山基地の砂岩で出来た五輪墓石が通範夫人（仙窓理心大姉）のものであることが確認できました。戒名と慶安四年の没年が読みとれます……」とのことでした。

そして、当然のことのようにその隣にある御影石の五輪墓石が通範のものではないかとの判断から、竹田館長と風早歴史文化研究会の新田常任理事の二人が３月１日夜、懐中電灯による調査の結果、通範の命日である、元和二丙辰年七月十五日の文字が判読出来ました。周辺の状況から見て通範の墓石に間違いがないことを確認しました。この他、北条市の片山基地では、通範の次男で風早二神氏の祖となった二神種範（彦左衛門法名宗閑　長慶院宗関居士）の墓石も見つかっており、その過去帳は法善寺にあることが村口副住職のご協力によって判明しました。そして片山基地の約七割～八割の過去帳が法善寺に残されていることも判りました」（「準備会ニュース第５号・1999年４月25日より）

近世風早二神氏御三家といわれる柳原、片山、常竹系譜の菩提寺と墓地は、これまでにほぼ確認されていますが、二神栗舎（ふたがみくりや・本名種亮）は「河野の善応寺に葬る」との記述（『伊豫史談・第11巻第３号・大正13年12月12月30日発行』を巡っての判断と確認が重要となっています。

■「追善供養絵図」の世界と発見の経緯

二神通範夫妻の「追善供養絵図」は、1998年12月４日に河野氏の菩提寺善応寺で発見されました。当時の準備会ニュースなどを振り返りながら、改めて発見当時の驚きと感激を振り返って見ます。

二神通範の極彩色「追善供養絵図」善応寺で発見

文化12年二神種方が修復供養

二神通範夫妻・追善供養絵図

準備会ニュースNo.２でも報告されていますように、1998年12月４日に幕末の風早俳壇の重鎮であった二神栗舎の墓地を善応寺に訪ねましたが、そのとき高縄住職から「二神氏のお墓は善応寺では確認されておりません。そのかわり二神氏に関わる何か資料があります……」と言って、蔵から木箱に入った古い絵図をもってこられました。一同何が描かれているのかとドキドキしながら、広げられた掛け軸のような供養絵図には、男女二人の座っている姿が描かれておりました。男性は髷を落とし、花柄模様の法衣と袈裟を纏い、左手には数珠をもった法衣に袈裟を纏った出家姿で、女性は眉を落とし、赤と白の布柄に菊と梅の花柄模様の衣装、右手には数珠を持ち何かを念じているように見えます。そして絵図の右端には「俗称二神隼人佐　藤原通範」と明確に記載され、絵図の中央には「樹枝道種居士」元和二丙辰年七月十五日と男性の側に、「仙窓理心大姉」慶安四辛卯年六月十日と女性の側に没年がそれぞれ書かれてあります。

一目でこの絵図は天正13年（1585）７月に善応寺の奥の谷にあった高穴城で小早川隆景の軍勢に攻められ、宇佐見、目見田氏らとともに戦った二神通範を追善供養したものであることが判ります。そして、この追善供養絵図を書き、通範を供養した人物の名前が裏に書かれてありました。それには「先代ヨリ善応寺二傳、文化十二乙亥年七月正當、二百年忌修復之、二神彦左衛門種方」とあり、これらを総合して理解すれば、「二神種方が、かつてこの風早郡で河野氏の家臣として名を馳せた、祖先の二神通範とその夫人を通範の200回忌のその日に当たる文化12年７月15日に、先代より伝わるこの絵図を修復して追善供養します」との意味にとれます。

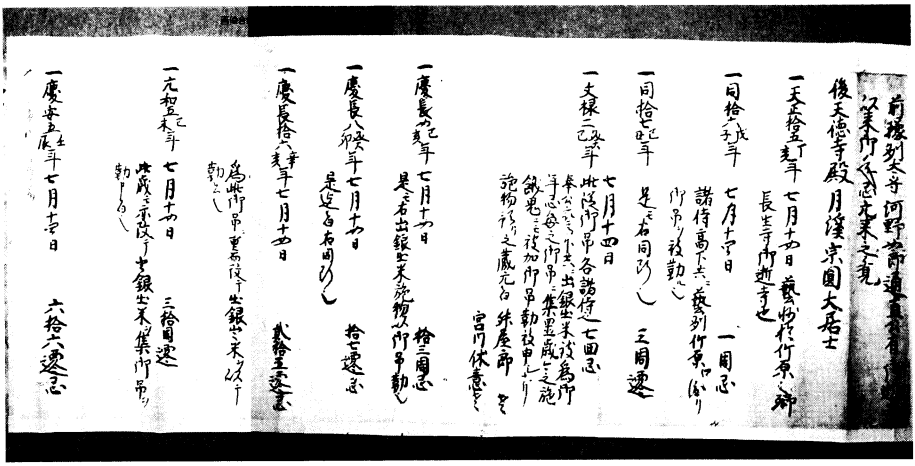
そして、この「追善供養絵図」を文化12年７月善応寺に供養した人物は片山二神氏の系譜にあたる二神彦左衛門尉種方で、嘉永元年成申８月３日に亡くなり、現在、片山墓地に眠っています。過去帳は、日蓮宗法善寺にあります。

■通範の出家と河野通直の年忌法要

二神島「本島宗家文書」は、通常「二神文書」と呼ばれていますが、この中には「河野通直年忌覚え書き」が残されています。天正15年（1587）７月14日に河野通直が、安芸国竹原の長生寺で没してから後も66周忌にあたる慶安５年（1652）７月までの間、二神氏が追善年忌供養をしていたことが記録として残されています。

但し、二神島に帰島した二神氏の菩提寺は真言宗安養寺であり、年忌供養をどこの寺社で行っていたのかについては不明です。二神通範夫妻の「追善供養絵図」により二神通範の出家姿が確認されていることから、通範自身が本人が亡くなるまでの二十五遷忌までは河野通直の菩提を弔っていたことが判ります。

しかし、その寺社が何処であったのか等については、現在までのと



河野通直年忌覚え書き（二神文書・神奈川大学日本常民文化研究所蔵）

前予州大守河野四郎通直公御逝去以来御年忌元来之覚

一　後天徳寺殿月渓宗圓大居士
　　天正十五年丁亥年　七月十四日
　　芸州於　竹原之郷長生寺御逝去也
一　同　十六年戊子年　七月十四日一周忌
　　諸侍高下共二芸州竹原江渡り御弔ヲ被勤ル也
一　同　十七年己丑年　是も右同断也　三周遷
一　文禄　二年癸巳年　七月十四日　七回忌
　　此段御弔各諸侍之奉公衆高下共出銀出来致、
　　為御年忌毎之御弔二集置、
　　歳々之施餓鬼ニモ被加御弔勤被申シナリ、
　　施物預之蔵元者
　　升屋郎老
　　宮内休意老
一　慶長　四己亥年　七月十四日　拾三周忌
　　是モ右出銀出米施物以御弔勤也
一　慶長　八癸卯年　七月十四日　拾七遷忌
　　是迄者右同断也
一　慶長十六辛亥年　七月十四日　二拾五遷忌
　　為此御弔重而改テ一丁出銀出米ヲ以テ勤著也
一　元和　五己未年　七月十四日　三拾周遷
　　此歳モ亦改テ出銀出米ヲ集御弔ヲ勤申音也
一　慶安　五壬辰年　七月十四日　六拾六周遷忌

「二神文書・二四一」

ころ確認されていません。少なくともいくら無住職とはいえ、善応寺は建立されていたのですから、出家した通範自身が善応寺で河野通直を年忌供養していたと考えられます。そしてその姿こそ、追善供養絵図に描かれた世界であると考えられるのではないかと思います。

なお、河野通直を年忌供養していた寺社としては、善応寺の他、天徳寺、それに没地竹原の長生寺と考えられますが、戒名はそれぞれ異なっています。善応寺では「長生寺殿月渓宗圓大禅定門」、天徳寺では「後天徳寺殿月渓宗圓大居士」、そして、長生寺では「長生寺殿月渓宗圓大居士」となっています。

通範夫妻の追善供養絵図の世界への試論

ところで、この通範夫妻の追善供養絵図の世界は、どのような意味を持っているのか考察し試論をしてみました。先ず、始めに浮かんできたのが「中世を生き抜いた人物が夫婦で絵図として描かれた例は全国でどの位あるのだろうか」との疑問でした。この疑問に対し「類例がないのではないだろうか」との意見と「いくらかあるのではないだろうか」との意見が並んでいますが、出家姿の通範と眉を落とし数珠を持ち何かを念じながらの夫妻像は、仲むつまじいと云ったイメージとはかけ離れており、特別な意味を持った場面であるとの考えが出てきます。

次に、この絵図を最初に供養したのは一体誰であったのか、絵図の裏書きには「先代より善応寺に伝わる」とあり、この絵図の描かれたのは夫人の没後と云うことになります。子供である通種、あるいは種範ということになりますが、通種の履歴から推定すると可能性は低く、種範が地元絵師に依頼して描かせたとの見解が出ています。その場合、夫人の着ている着物の赤色は現在でも鮮やかであせていませんから、使用した顔料はどのようなもので、どこで入手したのか関心があります。

最後に、絵図の通範夫妻の年齢についての意見が出されました。先

にも述べましたが、通範は発給文書の年代から推定すると85歳前後で没したことになります。夫人は慶安４年（1651）に没していますから、その後35年間生き抜いたことになります。夫人の没年を通範と同じ85歳と仮定すると、通範の没年時に夫人の年齢は50歳になります。果たして夫人と通範絵図の様子からして、一体夫人が何歳の頃なのかが問題となります。河野通直が没した天正15年時には通範は41歳位ですから、この時夫人は僅か６歳になりこの絵図の世界とは似合いません。

景浦勉氏は著書『二神家文書』の中で「河野通直の病死と二神氏の法要」について次のように述べています。「天正15（1587）年に通直は毛利輝元のすすめによって、安芸国竹原に隠退したが、やがてこの他で病死した。その期日については異説があるけれども、二神家文書のなかの河野通直年忌覚書（史料篇242）によって７月14日を正しいとすべきであろう。またこの文書によって、二神氏が通直の菩提を弔うために法要を続けていたことを察知し得られる。二神氏は河野氏の滅亡によって、やがて帰農したものと考えられる」

まさに景浦勉氏が「二神氏が通直の菩提を弔うために法要を続けていたことを察知し得られる」と述べていますので、その場面がこの絵図の世界であると考えられ、通範が出家した理由もここにあったのではないかと考えます。

法要はその後、１回忌、３回忌、７回忌と続けられ、慶長４年に迎えた通直の13回忌頃には通範53歳、夫人は19歳となり、次の17回忌も含めて絵図の世界とどうやら合致しそうです。

４．おわりに

二神系譜研究会の活動

二神系譜研究会が発足して９年の歳月が流れました。

2000年３月12日に北条ふるさと館で結成されて以来、様々な活動を進めてきましたが、結成の直接のきっかけとなったのは「二神姓を名乗る方の中で歴史に興味がある方達一同で交流する機会を持つ事が出

来たら素晴らしい」という発想からでした。

しかし、それまでにそうした機運が芽生えつつあったことは事実で、1995年夏に二神島で開催されたジ・アース、中島町などの主催による「二神島シンポジューム」で日本常民文化研究所の網野善彦氏が基調講演で「二神島の調査より見えてきたもの」と題し、二神氏と二神島、海から見た日本社会、などの項目で話されました。このシンポジュームに参加していた二神姓を名乗る方々や、同時期にインターネットのホームページに二神氏の歴史を登場させていた二神氏の方達。又はそれまでに各地で独自に二神会のような集まりを持っていた方々などによって一堂に交流する機会を持つ事になり発足させたのが二神系譜研究会です。

これまでの９年間に様々な取り組みを進めてきましたが、会の結成が評価出来る側面としては二神氏を名乗る約3,500人の方々から入会していない方も含めて「二神氏を名乗ることが出来てよかった」「一族が集まる冠婚葬祭などの機会に話題が増えて楽しい」との声や「これまでは関心がなかったがテレビや新聞で二神さんが登場すると何処の二神さんなのか関心が起きるようになった」「難しかった二神文書に、とても関心が持てるようになった」などの声が届いています。

一方、ここにきて様々な問題にも直面をすることになりました。それは、第１に組織の高齢化、少子化問題、さらに個人情報保護法の深度化による様々な情報の入手困難化と地下潜行化という問題です。この問題は二神系譜研究会だけの問題ではなく、現在のあらゆる組織が抱えている共通した項目ではありますが、一つの大きな壁に直面していることは事実です。高齢化の問題を取ってみても、系譜継承がきちんと出来ていれば問題はないのですが、現代の親子関係は核家族化やそれに伴う相続の法的な問題、地理的な事も含めて多様ですから一言で言い表すことはなかなか困難です。

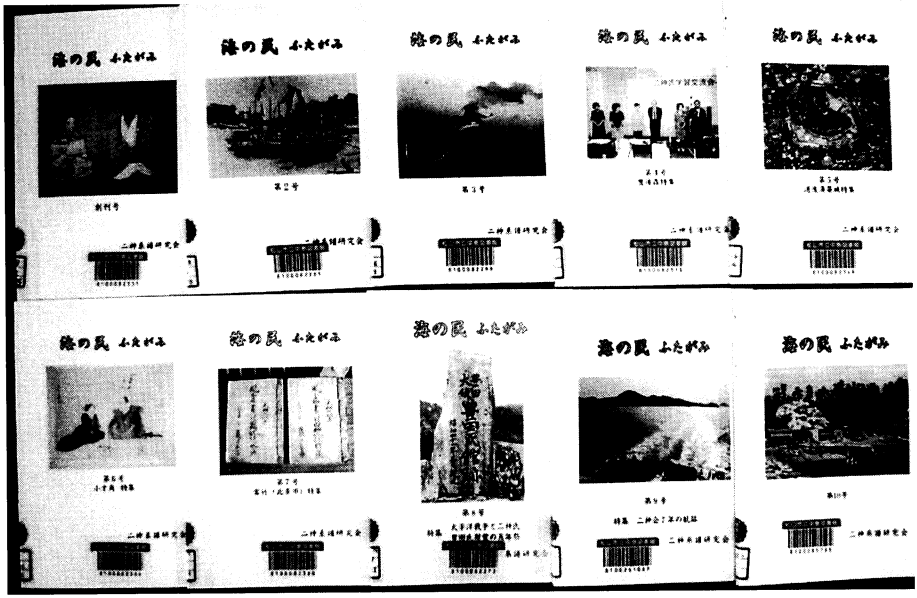
しかし、何はともあれ二神系譜研究会が結成され、他の系譜の方々にも影響を及ぼし、同じような活動を進めている系譜組織も結成され

ています。

今後の活動の方向は、基本的には会則で決めた方向で取り組んでゆきます。具体的には先に述べた評価出来る項目のさらなる発展と、課題となっている項目の改善と改革をはかることです。二神氏内の系譜交流と他系譜間交流の実施は勿論ですが、各系譜に伝わる二神文書の解読と情報の公開は、歴史研究者の協力を得ながら逐次実施していきたいと考えていますので、ご協力をお願い致します。

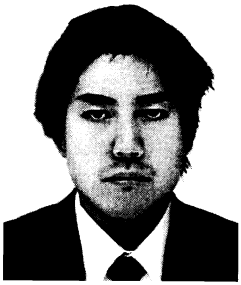
因みにこれまでに発表された「二神氏」に関する出版物及び論文は現在調査中ですが、今後、歴史家の中で二神氏を研究される方の出現を期待し、今後論文や著作が多く出されることを期待してやみません。

二神系譜研究会では、二神氏全体を網羅した『二神全史』（仮題）の刊行を計画しています。関係者の皆様方のご協力をお願い申し上げます。



「湯築城主河野氏を支えた家臣たち」展を終えて

湯築城資料館　溝田　直己



平成20年10月11日（土）から11月30日（日）まで湯築城資料館で開催した平成20年度企画展「湯築城主河野氏を支えた家臣たち」が無事終了いたしました。現在は、借用した資料の返却や常設展示に戻すなどの仕事に追われています。

今回の企画展は、二神氏を始めとした河野氏家臣団について取り挙げましたが、展示期間中の入館者数は１万人近くを数え、多くのお客様にご来館していただき、大変有り難く思っています。

昨年度の企画展「絵図・写真でたどる湯築城・道後公園」は、湯築城や道後温泉本館の絵図・写真という視覚に直接訴える資料を中心に展示し、入館者に大変好評でした。そのため今年度も古文書ばかりではなく、肖像画などの誰が見ても一目で分かる資料を展示したいと考え、石野館長に相談しましたところ、県内外に戦国武将の肖像画がいくつか残っているので、それを中心に展示したらどうかというアドバイスを受けました。これらの肖像画のうちもっとも資料的に面白いのは、善応寺所蔵の「二神通範夫妻肖像画」であろうと判断し、今回の企画展の展示資料の中心（目玉）に据えました。そこで実物をぜひとも借用したいと考え、二神系譜研究会の二神浩三会長や二神英臣事務局長のご紹介にあずかり、善応寺に資料調査にうかがい、借用の依頼をいたしました。善応寺の高縄住職の快諾を得まして、展示する運びとなりました。善応寺以外の場所で長期間にわたって、展示されたのは今回の企画展が初めてということです。

もう一つの展示資料の目玉は、今治市宮ケ崎の円久寺所蔵の「中川親武肖像画」です。

その調査にあたって、二神系譜研究会事務局長二神英臣さんを通じて、来島村上氏の研究で研究で著名な大成経凡氏を紹介していただき、同肖像画の調査ができましたし、借用して展示することができました。同肖像画の中川親武の顔は、肉眼では不鮮明でよくわかりませんでした。また、その着ている衣装（大紋）に付された紋もよく分からなかったのですが、赤外線写真の撮影の結果、中川親武の顔と衣装の紋がくっきりと浮かびあがってきたことに驚きました。とくにその紋が「洲浜紋」であったことは注目すべきではないかと思います。この紋は、河野氏の家紋の一つで、河野氏一族の寺町氏の紋と同じですし、地元の研究者の研究からも、中川氏は寺町氏流といわれていることと符合しています。その調査成果を活かすため、展示では実物の同肖像画とは別に、赤外線写真も展示しました。

企画展開催中、道後公園の周りに河野家家紋（傍折敷三文字紋）の付いた職旗を立てたことや各種イベントを毎週行ないました。また、テレビ・ポスター・チラシなどの広報に力を入れたことにより、おかげで道後温泉を訪れた観光客の方々が大勢お立ち寄りになり、多くの地元の方も企画展を見に来ていただきました。

展示を見た方々から、河野氏が能島村上氏の主家であるということを知らず、展示を見てはじめて知ったということや、一遍上人が河野家出身であるということ、道後のような街中の開けたところに中世城郭の跡が残っているのは驚きだということ等々の声が聞かれました。その中でも特に今回の企画展の中心に据えた「二神通範夫妻肖像画」についての感想が多く聞かれれた。夫婦が二人揃って描かれていることや、二神隼人佐通範という戦国武将の妻の肖像画が残っていることに驚かれている方が多くいました。また、地元の方から浅海・久枝・重見・今岡・桑原・戒能・南・垣生・正岡・中・栗上・土居・得能・大内・壬生川・中川・黒川・来島・二神・平岡など見知った名字（姓）の武士たちが河野氏と関係があったことを初めて知ったという声が多くありました。さらに今回の企画展に展示することはありせん

でしたが、大成経凡氏のご紹介により大分県玖珠郡玖珠町の安楽寺所蔵の来島（久留島）家歴代肖像画や東京の久留島家所蔵の肖像画の調査をさせていただく機会に恵まれ、有意義でした。

なお、今回の企画展示の準備を通じて二神系譜研究会の皆様のおかげで様々な人と出会うことができました。来島家ゆかりの土地にも行くことができ、大変勉強になりました。

ここに紙面をかりまして御礼申し上げます。

二神通範夫妻絵図

湯築城館長の Blog

道後公園での仕事や研究について、印象深かった出来事、日常でふと気づいたことなど、日々の雑感を館長自らが語るコーナーです。

湯築城資料館の企画展のオープン

雑感－石野弥栄@2008/10/15　09:03

去る11日（土）に湯築城資料館で企画展が開幕しました。今回のテーマは、「湯築城主河野氏を支えた家臣たち」であり、戦国時代末期の河野氏家臣団のうち、いくつかの家臣を取り上げました。とくに、河野氏の海上基盤をなす瀬戸内海の海賊衆である来島村上氏、能島村上氏、二神氏の当主の画像や、河野氏一族・譜代家臣の画像をなるべく多く紹介し、それぞれに関連する古文書を配しました。十年以上前、歴史文化博物館に在職中、「伊予の水軍」というテーマで企画展を開いたことはありますが、河野氏と瀬戸内海賊衆とのかかわりは、どのようなものであったのか、河野氏自体に水軍はあったのか、等々の未解決の問題は残っています。また、河野氏がどのようにして、戦国時代を生き抜いていったのかを考えるとき、海賊衆とのかかわりだけで解決できるものではありません。河野氏を取り巻く周辺諸大名との関係をはじめ、河野氏の領国支配のあり方、とりわけ、一族出身の官僚層とのかかわりなどが、いっそう解明されねばなりません。今回の企画展がその解明に向けての足がかりの一つになれば幸いです。

企画展関連講演終わる

河野氏－石野弥栄@2008/11/11　11:39

去る９日（日）午後１時から現在開催されている企画展「湯築城主河野氏を支えた家臣たち」に関連して、私と二神英臣氏とで講演いたしました。私の話の骨子は、いずれ二神系譜研究会の雑誌『海の民　ふたがみ』に講演録として掲載することになっています。また、湯築城資料館で発行する『道後公園だより』にも研究の一端をまとめて、掲載したいと思っています。戦国期の河野氏の家臣団の構成を示す確実な史料はなく、江戸時代に編纂し、その後増補したとみられる『河野分限録』という史書があるにすぎません。しかし、この書は最後の湯築城主河野通直の時代を想定（仮託）して編集されたもので、厳密な批判をした上で使用しないと、危険です。昔、この書の記述をそのまま認めて、分析して発表した論文がありますが、その後だれもこの論文を論う研究者がなく、そのままになっています。ある程度参考になるところもありましょうが、河野氏家臣団の組織が、この記述どおりであったかどうかは、個別事例の検討を積み上げて、いちいち検証しなければ使えません。史料に書いてあるからといって、それがそのまま史実にはなりません。史料の質が問われねばなりません。私のあとに講演された、二神系譜研究会の事務局長二神英臣さんも同様なことを指摘されておられました。さて、戦国期の河野氏家臣団は、「河野氏家中」として総括され、その配下の家臣たちもまた、それぞれ家中を形成し、それらが河野氏家中に包摂されていたものと思われます。河野氏は中世全期間にわたって存続していますから、時代によって家臣たち（古くは被官、家人、所従、郎党などさ

まざまに表記された）の顔ぶれも異なっています。ただその中核になったのは、河野氏から分出した一族です。かれらが軍事・行政面で活躍していることは、断片的な史料の上からもある程度分かります。「予章記」という中世前期の河野氏の歴史を叙述した書物に「河野一族十八ケ村」（ただ十八ケ村とも見える）と見え、河野氏一族を総括する言葉が見えます。一氏族が一村を基盤とするような図式的な概念は、荒唐無稽なものとして、今まで私は歯牙にもかけなかったのですが、最近、紀伊国の熊野社文書の中の「潮崎氏檀那目録」を見ていて、この「河野ノ一族十八ケ村」という記述を見出しました。もしかしたら、こういう概念は、河野氏の中で存在していたのではないかと思うようになりました。現実的に河野氏一族ごとに系図が作成され、それをもとに檀那のリストが作られ、熊野社の御師（おし）

湯築城公園

がその権利を売買したと考えられます。この「十八ケ村」という概念が、のちに「河野十八将」という概念に置き換えられていったものと見られます。これらは実態を示すものとは思われませんが、河野氏家臣を束ねる言葉として重宝されたのでしょう。われわれは、この言葉に煩らわされることなく、個々の家臣たちの実像を確かな文書・記録で検証していく必要があろうかと思います。今回の企画展では、代表的な河野氏家臣を取り上げました。企画展向きの肖像画（画像）を中心に据えましたが、文書の中にも興味深いものがあるはずです。企画展であまり触れなかった、武井氏（本来は武任氏）などもその一つです。湯築城下を拠点にした商人的武士であったのではないかという試論を呈示しました。武井氏は「河野分限録」では横山城主南氏の配下としか位置づけられていませんが、文書の中では、湯築城主河野氏（通宣）や町衆（湯築城下の町場に住む人々）の篤い信頼を得ていたことがほの見えますね。

湯築城址

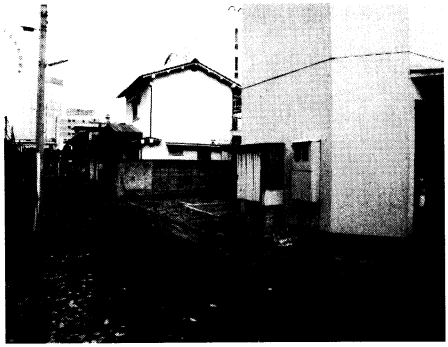
系譜・家紋紹介（No.11）

編　集　部

藤原半町（ふじわらはんちょう）二神氏

1．はじめに

かつて藤原半町二神氏が藩政時代から戦前にかけて居住し、活動拠点としていた現在の松山市末広町は幕末の弘化元年（1844）に藤原末ノ町と藤原半町が合併して成立と伝えられています。その移り変わりについては次の通りとなっています。



旧藤原半町二神氏屋敷跡周辺付近
（愛媛県立松山南高等学校正門近く）

末広町・すえひろまち〈松山市〉

松山平野の中央部、石手川右岸に位置する

〔近世〕末広町　江戸期～明治22年の町名

江戸期は松山城下の町名の一つ。明治18～22年は松山を冠称。

弘化元年に藤原末ノ町と藤原半町が合併して成立と伝える。城下の南に位置し、江戸後期、東は湊町・春日町・榎町、西は久保町・藤原村、南は藤原村、北は出淵町に接した。南端は村部に接する町筋。町家が建ち並んでいて、１・２丁目に分かれていたと伝える。明治６年愛媛県に所属。「温泉郡地理図誌」によれば、町の規模は412間半、戸数197・人口577、うち士族39。明治５年法竜寺を仮用し智環学校開校、同校は同10年榎町へ移転。同22年松山市の大字となる。

〔近代〕末広町　明治22年～昭和５年の松山市の大字名

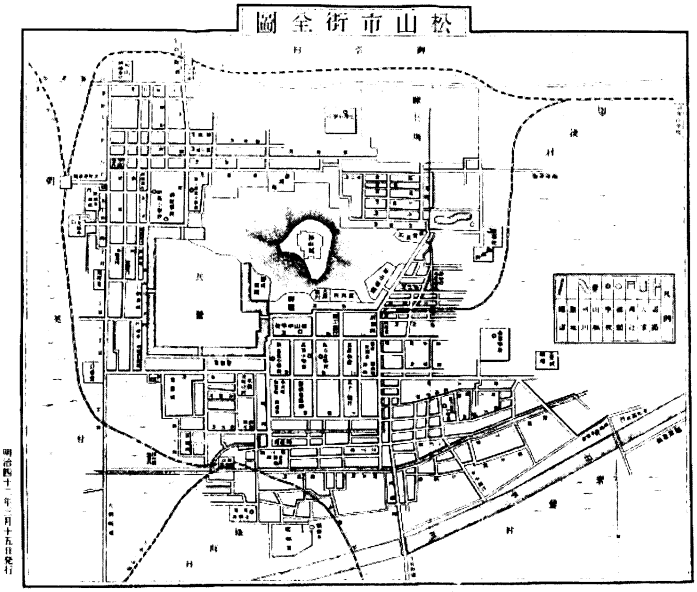
１～２丁目がある。明治27年２丁目に伊予米穀取引所が開設され、

昭和５年鉄筋に改築。この間の大正７年、米騒動の際に香川熊太郎理事宅が襲われた。明治29年松山商業銀行創立。同34年愛媛高高等女学校が県立となり当地に移転同43年松山市温泉伊予郡茶業組合認可。大正８年松山無尽（現愛媛相互銀行）創立。同14年正宗寺境内に正岡子規旧宅の木材を使って子規堂が建てられた。その後２度火災にあい、現在のものは昭和21年建築。昭和５年大字廃止により町名となる。

〔近代〕末広町　昭和５～39年の松山市の町名。１～２丁目がある。もとは末広町１～２丁目と大字藤原・久保町の各一部。昭和７年１丁目の一部が相生町となる。同39年末広町、現行の柳井町３丁目・三番町５丁目・千舟町５丁目となる。

〔近代〕昭和39年～現在の松山市の町名。もとは相生町・春日町・真砂町・室町・末広町１丁目の各一部と久保町。区画整理により成立。昭和45年の世帯311・入口860。

（『角川日本地名大辞典』昭和56年10月８日発行より）



旧松山市内地図（明治42年３月）

藤原半町・ふじわらはんちょう

末広町の藩政時代の呼称は「藤原」である。元来、温泉郡藤原村（江戸期～明治二十二年）の領域だった所へ、道沿いに次第に家が建ち始め町を形成していった。

古図で見ると、末広町の旧二丁目の湊町口から出淵町にかけては藤原末之町、湊町口から南が藤原半町となっている。西町が藤原西町、弁天町が藤原魚町と、あたり一帯藤原だらけ。このうち、二丁目分の藤原末之町は、弘化元年（1844）以前に末広町に改められている。おそらく、町として成立するほど民家が増えたのだろう。藤原半町が末広町に組み入れられたのは、明治になってからの話。古老によると、大正頃でも一丁目を「ハンチョー」と言っていたそうだ。

末広町一丁目は、市中心部から南の方面への出入り口だった。温泉郡石井村の古川などから、米を積んだ荷車が狭い道を通って市内に入り、帰り際に一丁目で買い物をした。町は、そのような人たちを相手にして商売した。戦後の区画整理で一丁目の通りは、かなり南まで一直線に延びたが、それまでは松山刑務所（昭和47年、温泉郡重信町に移転、跡地には県立中央病院が三番町六丁目から移転）のあたりで行き止まり。そこからは、右に折れて室町に出た。音に「狭い町筋でしたよ」と強調する。荷車がやっとすれ違う程度だった。女学校へ通学する生徒たちも、二列で歩くよう申し渡されていたというから、だいたい想像がつく。

また、末広町一丁目は寺が多い町だ。赤穂浪士に縁がある「輿望寺」、ロシア人捕虜を収容した「法龍寺」、子規堂のある「正宗寺」などバラエティーに富んでいる。

このうち、正宗寺名物となつているのが子規堂。大正14年（1925）11月に中ノ川べりにあった子規旧宅（生いたちの家）の木材を使って建てられたものだったが、昭和８年２月、本堂とともに焼け落ちた。

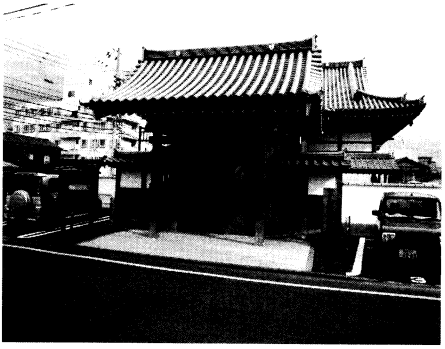
（『忘れかけの街・松山戦前戦後』2002年池田洋三著より）

2．藤原半町二神氏の歴史

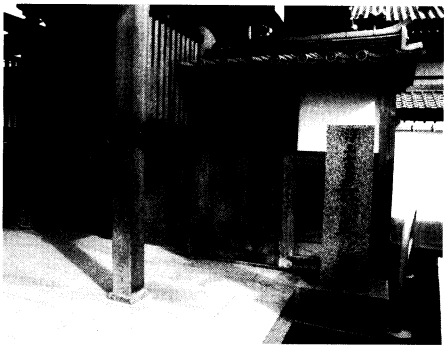
これまで藤原半町二神氏の歴史については、二神系譜研究会が発足するまでに研究もしくは考察された足跡が確認されていません。

藤原半町二神氏は末廣町が成立以前、藤原半町と云われていた頃からこの地に住居を構え、伊予松山藩の小姓役として出仕していましたが、それ以前の出自については史料が無く不明です。

藤原半町二神氏の系譜は現在の松山市末広町には住んでいません。これまでに確認されているのは広島市佐伯区にお住まいの二神洋臣氏だけになっていますが、古文書や系図などの史料はあまり残されていません。しかし、二神系譜研究会速報№30で報告しているように、藤原半町二神氏の最古除籍謄本、養子縁組の二神三郎氏出自の歌原家除籍謄本、歌原家系図、家紋図。さらに松山藤原半町、二神又太郎と銘の入った真鍮製の標札、藩政や時代から明治初期の古銭などが残されています。



【浄土宗　福聚山長正寺の山門】



【菩提寺長正寺】

藤原半町二神氏の菩提寺は、松山市土橋町にある浄土宗福聚山長正寺で、最近同寺から提出された過去帳によれば、最古の年代として記録されているのは貞享４丁卯年（1687）に没した人物で、二神氏としてだけか残されていませんので最古であるかどうかの判断は出来ません。次は、元禄17甲申年（1704）６月28日に没した安衛門ですが、藤

原半町二神氏の過去帳全体を把握した上での判断ではありません。長正寺は天和３年（1683）に創建された比較的新しい寺で、元禄６年（1693）10月15日の日付が入った「福聚山阿弥陀如来縁起」には当時の二代目住職、然蓮和尚が阿弥陀如を再興して寺の客殿に安置した経緯を述べています。

３．藤原半町二神氏系譜

藤原半町二神氏系譜当主で会員の二神洋臣氏（広島市佐伯区在住）によると、藩政時代に松山藩士で小姓役として出仕していた二神系譜のことで、旧藤原半町に屋敷があったと伝えられています。現在の松山市駅から松山南高校の辺りにかけて屋敷があったと云われ、弘化元年（1844）に旧藤原半町と旧藤原末ノ町が合併して出来た旧末廣町には、明治６年時点では戸数197、人口577人が居住し、そのうち士族は39人との記録が残されていますが詳細は不明。系図によりますと、洋臣氏の祖父祐廣の時代に跡継ぎが無くなり絶家となる可能性が出てきたため「祖父の姉妹の嫁ぎ先」である歌原家から養子として迎え入れ跡を継ぎました。その「祖父の姉妹の孫」が二神洋臣氏の父である三郎氏になります。三郎氏の時代に朝鮮釜山に渡り、昭和19年洋臣氏はここで生まれました。半町二神氏伝来の品々が引き上げ後の混乱のなかで可成り散逸してしまいましたが、歌原家から伝来したものを含めて平成20年２月に調査を行いました。

これまでのところ半町二神氏の宗家は判明していませんが、菩提寺の長正寺には二神氏歴代の過去帳が存在しており、平成20年12月墓地の存在と併せて簡単な系図が長正寺から二神系譜研究会に提出されましたが、内容が余りに簡単なため再度過去帳の原本調査を実施することにしています。

小姓

武家の職名で君側の雑務を勤めました。室町幕府では将軍に近待する者を称し、のち一種の役名となりました。江戸幕府では中奥に向侯し、雑務を勤める表小姓、将軍の身辺の雑務に従う奥小姓の２職があり十数名いました。

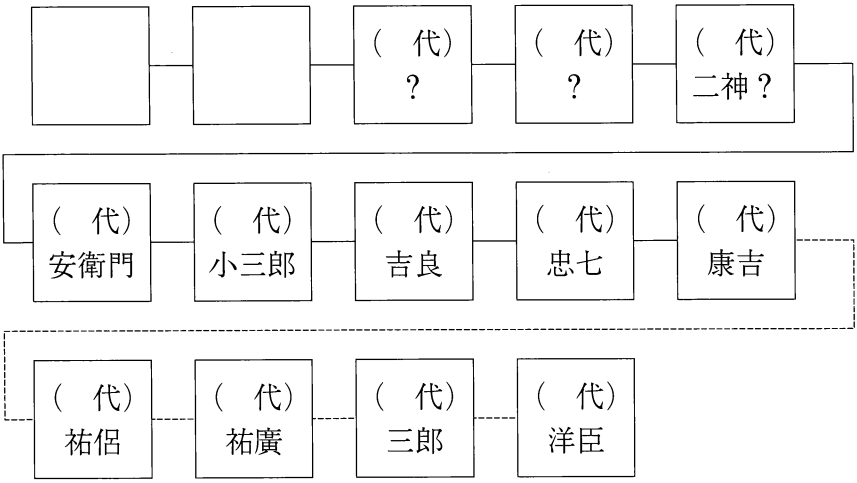
伊予松山藩では、大小姓頭６名、大小姓頭格、御奥頭役９名、寄合大小姓頭３名、御小姓役31名の他、江戸屋敷にも次小姓頭役があったようです。また、大小姓頭嫡子、大小姓頭格嫡子との職名があり、それぞれの嫡子が任命されていました。

因みに幕末の御小姓役31名には15石三人扶持で、二神誠之助が任命されています。これまでのところ、今日に繋がる二神誠之助の系譜は確認されていません。（安政６年松山藩御役録）

二神又太郎の銘票（真鍮製）

藤原半町二神氏伝来小判

【藤原半町二神氏系譜】



（＊長正寺から提出された資料によって作成）

藤原半町二神氏の由来

二神洋臣氏

私は、現在広島市佐伯区で妻や子供孫たちに囲まれながら美容室を経営しています。

私は、昭和19年に朝鮮の釜山で生まれました。父三郎と母ミユキは、昭和18年に結婚し釜山へ渡り、直後、私が生まれましたが終戦で故郷の松山に引き上げてきました。父は戦後事業を経営していましたが、やがて亡くなり母が事業の後始末をしました。

現在の私が後を継いでいる二神家は、藩政時代伊予松山藩の小姓役をしていたと云われる系譜で、戸籍上の祖父の時代に絶

家となるところを、高祖父に繋がる系譜の歌原家から父三郎が、小田町土居家から母ミユキが、俗に言う入り婿、入り嫁として入籍しました。

当時、二神家の場所は現在の松山市駅から南方面の末広町にあったそうで、藤原半町と呼ばれていました。

母ミユキは、昭和14年３月に済美高等女学校（現済美高校）を卒業しました。当時の通学路にこの二神家の大きな屋敷があったそうですが、まさか、後にこの家の嫁になろうとは考えもしなかったと今になって当時を回想をしています。

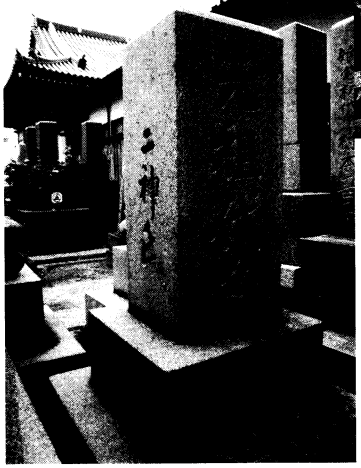
藩政時代には、小姓役の二神家に藩主も度々訪問することもあったそうで、その時の接待用お膳・調度類などもありましたが、釜山に渡るときに殆どが処分されたようです。代々残されていた二神家の品物は、今年初めに二神系譜研究会の役員の皆様にご案内した内容の通りです。（速報№30参照）菩提寺は浄土宗の長正寺で、過去帳も残っており父が住職に系図を書いて頂くようにお願いしていますが、これまでのところ報告されていません。（談）

現在の二神洋臣氏のご一家（調査団と共に）

4．長正寺過去帳に残る藤原半町二神氏の俗名

1	貞享４丁卯年（1687）	寂	二神	？
2	元禄17甲申年（1704）	06月28日寂	二神	安衛門
3	安永７戊戌年（1778）	12月13日寂	二神	小三郎
4	安政６年己未（1859）	10月12日寂	二神	忠七
5	明治４辛未年（1871）	09月27日寂	二神	吉良
6	明治35年壬寅（1902）	08月28日寂	二神	康吉
7	昭和63年戊辰（1988）	01月22日寂	二神	三郎

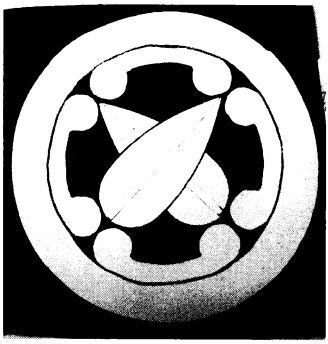
【浄土宗　福聚山長正寺墓地】



【明治35年二神祐廣建立の墓】

5．藤原半町二神氏家紋

藤原半町二神氏家紋



「丸に四つ鐶輪と二枚笹」

藤原半町二神氏の家紋は「丸に四つ鐶輪と二枚笹」と云われる紋様です。

鎧紋（かんもん）

「鐶（かん）とは金属製の輪で、たんすの引き手、茶釜の取っ手、蚊帳の四隅の吊り輪などに用いられている。

鐶紋はこれを図案化したものである。この鐶がどういうことから紋章に用いられるようになったのか、由来ははっきりしないが、鐶を組み合わせるとさまざまなおもしろい形ができることを知り、文様などにも使っているうちに、自然に家紋に採用されたものであろう。一説によると、木瓜紋の外枠に似ているので、木瓜紋からきたともいわれる。事実、木瓜紋と鐶紋とが混同されることもあったようだ。

鐶紋は、環が内側に向いているものと、外側に向いているものとがあり、外向きのものは「外向き鐶紋」と呼ぶ。

鐶紋の環の数は三～八個がふつうで、「三つ鐶」「五つ鐶」などという。丸くなるように組み合わせたり、四角や菱形に構成したり、丸で囲ったりして、いろいろに変化する。巴や井桁、菊、雀など、他の紋を鐶で囲ったものなどもある。また、単純な輪形の鐶ではなく、輪を少し折った装飾的な鐶を唐鐶といい、「三つ唐鐶に三つ剣」や「唐鐶銘瓜」など、バリエーションが豊富である。

鐶紋にかぎらず、こうした輪状の紋は他の紋と組合わせられる例が多いようである。

使用家は、『寛政重修諸家譜』によれば、藤原氏支流の松波氏であ

る。「丸に鐶」のほか、中心から剣を四つ放射する「鐶四つ剣」も使用している。これは武家であることを強調したのかも知れない。輪違い紋の中には鐶紋と似ているものがある。実際に「鐶三つ組金輪」のように鐶を用いた輪違い紋も存在する。輪の一カ所が切れているのが鐶、切れてないのが輪である。」

（『家紋　知れば知るほど』発行・実業之日本社）

藤原半町二神氏のご先祖が「丸に四つ鐶輪と二枚笹」を家紋に選んだのは、中家藤原氏出自の藤原道隆を祖とする二神氏に因み、藤原氏支流がこの「丸に鐶」の家紋を使用していることから二神氏に縁のある数字「二」と、笹は何代も続く意味の文字であることから、それに因み二枚笹を図案化したのではないかと想像されますが事実は不明です。

参考までに、この幕末松山藩士として出仕し、持筒頭として百石を給与されていた二神伝蔵の家紋は「丸に龍胆崩」で、菩提寺は浄土宗善勝寺となっています。

文書紹介

「二神家外記」「二神家内記」について

中には明らかな間違いもありますが、御荘二神氏の城辺二神家に伝わる「二神家外記」「二神家内記」があります。これは、城辺二神家８代目礼和（深蔵）氏の弟「嘉（あやなり）」氏が書いたものを、堀舎の二神伝蔵氏が書き写したものです。嘉氏（藤種、号は回天）は江戸から明治にかけて生きた方ですが、いつごろ書いたのか定かではありません。

「二神家外記」は、ご先祖藤原鎌足から種基の子どもたちまで。

「二神家内記」は城辺二神家の正種から９代駿吉までのことを記しています。

（参照：海の民ふたがみ第２号Ｐ58～Ｐ73）

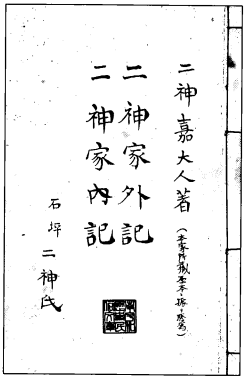
今号は「二神家外記」、次号は「二神家内記」と２回に分けて掲載します。なお、原稿作成に関しては、藤田儲三氏が謄写したものを使用しました。文字など十分でない部分や常用漢字にしている部分があります。不明部分は□にしています。

編　集　部

二神家外記

本宗二神家外記

謹テ按スルニ高祖ニ二神忠恵子ハ即チ大織冠藤原鎌足ヨリ出タリ鎌足十餘世ノ正胤ニ豊田輔平ト曰フモノアルナリ乃チ其ノ系統ヲ畧叙スルコト左ノ如シ（註：ここでは横書きなので「下の如し」とご理解ください）



藤田儲三氏が謄写した「二神家外記・内記」

輔平字ハ某ナリ治民ノ才アリ乃チ大和守ニ任セラレタリ輔平ニ庶子アリ義平ト日フナリ

義平字ハ左馬之丞ナリ天資勇敏ニシテ義ヲ好メリ義平ニ三男一女アリ
長ハ義豊ナリ次ハ輔成ナリ次ハ輔高ナリ季ハ女某ナリ
長子義豊字ハ委之助ナリ不幸早ク没ス
第二子輔成ハ即チ父ノ後ヲ承継ス
第三子輔高字ハ甲作
季女某ハ嫁家詳ナラス

輔成字ハ内蔵之助ナリ文武才幹アリ輔成乃チ姓族ヲ別シテ知行寺ト稱ス輔成即チ輔正ヲ生メリ

輔正字ハ武蔵之助ナリ輔正即チ種義ヲ生メリ

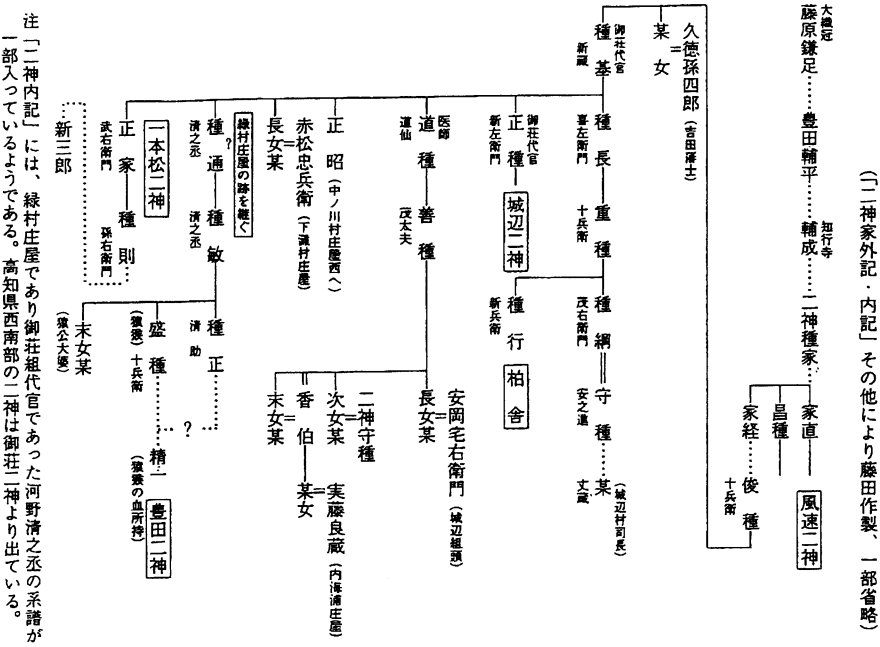
種義字ハ大炊太郎ナリ天性剛明ニシテ善所ナリ学ハ文藝武術ヲ兼ネタリ當時令名ハ世ニ籍々タリ然ニ大臣知ラスシテ登用セサルナリ後世二神家ノ子孫多クハ諱名ニ種字ヲ用ルアルモノハ蓋シ種義ノ賢且ツ徳ヲ追慕スレバナリ種義三男三女アリ長ハ種家ナリ次ハ種房ナリ次ハ家輔ナリ次ハ女某ナリ次ハ女某ナリ季ハ女某ナリ
長子種家ハ家ヲ弟義房ニ禅(ゆず)リ而テ諸国ヲ漫遊セリ
第二子義房字ハ太郎兵衛ナリ兄種家ノ禅ヲ受ケ而テ父ノ跡ヲ承継セリ
第三子家輔字ハ新羅次郎ナリ
女子三人ハ嫁家詳ナラズ

種家字ハ藤十郎ナリ天資剛毅ニシテ撓(たわ)マス好テ経史ヲ読シ且ツ武芸ヲ善クス乃チ家ノ基ヲ弟義房ニ授ケ而テ寛治年間広ク天下ヲ周リ□ク古跡ヲ案フ因テ到ル所ノ処ニ於テハ則チ有志ノ士ヲ招会シテ兵法ヲ

談説セリ漫遊中乃チ伊予国ニ至リ□ニ風早郡二神島ニト　居シタリ
是ニ於テ族姓ナル知行寺ヲ更テ二神ト白フ今日ニ至ッテハ子孫頗(すこぶ)
ル繁盛ナリ種家一子アリ種吉ト称セリ

種吉字ハ八十郎左衛門ナリ種吉即チ種直ヲ生メリ

種直字ハ十郎左衛門尉ナリ勇毅ニシテ課畧アリ種直三男アリ長ハ家直
ナリ次ハ昌種ナリ季ハ家経ナリ
長子家直字ハ四郎左衛門尉ナリ父ノ後ヲ継承セリ家直ハ武幹アリ勇
猛ヲ以テ聞ク
第二子昌種字ハ大炊之助ナリ世ニ武名アリ
第三子家経出仕シテ別ニ家基ヲ興セリ



注「二神内記」には、緑村庄屋であり御荘組代官であった河野清之丞の系譜が一部入っているようである。高知県西南部の二神は御荘二神より出ている。

家経字ハ五郎左衛門尉ナリ仕テ長門守ニ任セラレタリ勇義ヲ以テ名ヲ著セリ家経一男四女アリ長ハ種盛ナリ次ハ女某次ハ女某ナリ次ハ女某ナリ季ハ女某ナリ
長子種盛ハ即チ父ノ後ヲ継承セリ
女子四人ハ嫁家詳ナラス

種盛字源左兵衛ナリ天資剛直ニシテ頴敏ナリ身ノ長サハ六尺ニシテ音聲ハ鐘ノ如シ深ク兵法ノ奥義ヲ探リ世人ヲ親ルコト□□豚犬ノ如シ壮年ノ士従テ兵ヲ学フモノ頗ル夥多ナリ嘉禎年間征伐ノ事アリ征軍利アラス時ニ種盛カ戦シテ没ス而シテ子孫ハ官禄ヲ食マス降テ□□ノ間ニ在リ然ニ世人以テ武族名家ト為シテ敬礼ヲ子孫ニ加フト云フ種盛ニ一男アリ種遠ト日フナリ

種遠字ハ十郎兵衛ナリ種遠或ハ農事ヲ勤メ或ハ琴書ヲ楽ミ以テ世ヲ終レリ種遠即チ種輔ヲ生メリ

種輔字ハ兵衛ナリ種輔文学アリ頗(すこぶ)ル心ヲ農事ニ用フ種輔即チ種平ヲ生メリ

種平字ハ次郎兵衛ナリ種平家ヲ治ル事甚タ厳ナリ子弟従□皆ナ孝弟ヲ尚フト云フ種平即チ孝種ヲ生メリ

孝種字ハ三郎兵衛ナリ孝種天性孝順ニシテ文学アリ孝義ヲ以テ名ヲ著ハセリ世人呼テ孝蔵ト日ヒ或ハ孝兵衛ト日フ数々官□ヲ受タリ
孝種即チ高種ヲ生メリ

高種字ハ一郎左衛門ナリ高種即チ忠種ヲ生メリ

忠種字ハ萬十郎ナリ忠種即チ孝種ヲ生メリ

吉種字ハ一郎兵衛ナリ文武ノ才アリ芸能ヲ以テ名ヲ著ハセリ吉種即チ貞種ヲ生メリ

貞種字ハ十左衛門ナリ天資剛明ニシテ学ヲ好ム深ク兵法ノ蘊奥ヲ窮ハメタリ貞種今川某ノ女ヲ娶リ而テ男女七人ヲ生メリ長ハ種秋ト日フ其ノ餘ハ名字詳ナラス

種秋字ハ忠左衛門ナリ種秋文武ノ才アリ学問厭カス剣法槍術ニ長セリ乃チ私ニ道場ヲ開設シテ専ラ武芸ヲ世人ニ教授ス是ニ於テ壮士遠方ヨリ来会スルモノ三百人ニ至レリ是レニ由テ大ニ資財ヲ蓄タリ種秋二男アリ長ハ種時ナリ次ハ定種ナリ
長子種時ハ即チ父ノ後ヲ承継セリ
第二子定種字ハ次郎左衛門ナリ勇健ニシテ武芸ヲ善クセリ

種時字ハ一郎左衛門ナリ勇毅ニシテ□略アリ兄弟皆ナ共ニ武術ニ長セリ當時候伯ニ於テハ種時兄弟ヲ用ント欲スルモノ甚タ多シ然ニ兄弟皆ナ固辞シテ起タス終ニ官禄ヲ食マスシテ没ス種時即チ種條ヲ生メリ

種條字ハ十郎兵衛ナリ種條天性剛勇ニシテ果断ナリ為ス可キノ義ヲ見レハ則チ身命ヲ惜マス毀誉ヲ顧ミサルナリ
此時ニ當リ官政□ル酷烈ニシテ百姓困苦ヲ懐クモノ鮮シト為サス種條□慨悲憤聲ヲ呑テ□ニ之ヲ歎ス因テ将サニ上書シテ幣ヲ革メ便ヲ開ントスルナリ而テ事末ヲ果サスシテ没セリ同志ノ士深ク之ヲ惜ムト云フ
種條二男六女アリ長ハ永種ナリ次ハ女某ナリ次ハ女某ナリ次ハ女某ナリ次ハ女某ナリ次ハ女某ナリ次ハ女某ナリ季ハ種統ナリ
長子永種ハ即チ父ノ後ヲ承継セリ
女子六人ハ嫁家詳ナラス
季子種統字ハ忠之進ナリ出テ某藩ニ仕フト云フ

永種字ハ孝右衛門ナリ永種多病ニシテ家道□ノ衰フ且ツ累歳不幸ノ事
アリ大ニ資産ヲ失セリ永種二男アリ長ハ種明ナリ次ハ種蕃ナリ
長子種明ハ即チ父ノ後ヲ承継セリ
第二子種蕃字ハ鉄之助ナリ不幸ニシテ早ク没ス

種明字ハ松右衛門ナリ天性剛毅ニシテ朴直ナリ種明ノ時ニ當テハ家門
既ニ衰微シテ□粥以テ口ヲ糊ス其ノ貧困ナル事比クノ如シ然ニ種明
篤ク士人ノ義ヲ守リ貧困ノ為メニ屈撓セス節操念厳励ナリ世人□テ
□□ヲ興レハ則チ種明固ク辞シテ受ケズ興者強テ聴サス種明已ム事
ヲ得ス其ノ贈物ヲ受タル事聞クアリ時ニ世人或ハ呼テ乞食松ト日フ
ト云フ種明二男アリ長ハ種経ナリ次ハ俊種ナリ
長子種経ハ父ノ後ヲ承継セリ
第二子俊種ハ兄種経ノ遺命ヲ受ケ而テ宗家ヲ承継セリ

種経字ハ久右衛門ナリ天資英邁ニシテ学ヲ好ミ経史ノ大義ヲ得タリ常
ニ先祖家経種盛ノ家ヲ興サント欲スルノ志アリ乃チ始テ宇和島藩ニ
出仕シテ厚禄ヲ受ク是レニ於テ大ニ家運ヲ挽回シタリ因テ父ヲ孝養
セリ子孫世ニ官吏トナリ種経人ト為リ酒ヲ好ム朝幕之を呑飲スル事
量リナシ齢未タ四十二満タスシテ卒セリ世人之ヲ歎惜ス種経ハ嗣子
ナシ乃チ遺言シテ家ヲ弟俊種ニ伝タリ□レ二神家中興ノ英傑ナリ

俊種字ハ十兵衛ナリ天資忠愛ニシテ学ハ文武ヲ兼タ且ツ理財ノ□ニ長
セリ人ト為リ恭勤ニシテ能ク職ヲ奉ス官務ヲ視ル事猶ホ家事ノ如ク
又是レニ由ツテ能吏ノ各□ル世間ニ伝播セリ□□以来善ク志ヲ継キ
善ク事ヲ述ヘ而テ家門益々赫々タリ萬治元年十二月二十九日卒ス浮
屠法諡ヲ授テ空□院宗寛座元居士ト日フ俊種ニ二男三女アリ長ハ女
某ナリ次ハ種基ナリ次ハ十三郎ナリ次ハ女某ナリ季ハ女某ナリ
長女某ハ吉田藩士久徳孫四郎ニ嫁通ス
通子種基ハ即チ父ノ後ヲ承継セリ

第二子十三郎ハ不幸早ク世ヲ去レリ
女子二人ハ嫁家詳ナラス

種基字ハ新蔵ナリ種基ハ人ト為リ長身ニシテ□力アリ汎愛ニシテ人ヲ疑ハス文才武幹アリ□ル功名ヲ喜ミ而テ財利ヲ軽ンス世人ノ敬服スル所ト為レリ萬治二年正月父ノ官職ヲ承襲ス而テ天和二年某月家ヲ長子ニ傳テ老セリ在官スルコト二十四年ナリ當テ世ニ所謂山出中駄馬ノ稲田ヲ開□シタリ藩主其ノ労功ヲ嘉シテ賜フニ養老ノ地ヲ以テス而テ永ク租税ヲ免除セリ宝永四年四月二十七日卒ス壽八十九浮屠法謚ヲ授テ妙運院覚室了園居士ト日フナリ種基六男二女アリ長ハ種長ナリ次ハ正種ナリ次ハ道種ナリ次ハ正昭ナリ次ハ女某ナリ次ハ種道ナリ次ハ女某ナリ季ハ正家ナリ
長子種長字ハ喜左衛門ナリ天性多病ニシテ公事ヲ掌ルニ勝ヘス因テ父ノ後ヲ承継セズ乃ヲ産ヲ分ッテ別ニ一家ヲ為セリ種長一男ヲ生ム名ハ重種字ハ十兵衛ナリ重種二男ヲ生ム伯ハ種綱字ハ茂左衛門ナリ叔ハ種行字ハ新兵衛ナリ種綱ハ即チ父ノ後ヲ承継ス種行ハ出テ宇和島城下柏舎新兵衛ノ後ト為レリ種綱ニハ女子アリ而テ男子ナシ是レン由ッテ従兄通真ノ第四子守種字ハ安之進ヲ養テ後嗣ト為セリ子孫相ヒ承テ乃チ明治年間に至リ伊予国南宇和郡城辺村ニ司長アリ二神某字ハ丈蔵ト日フ比レ其ノ後裔ニシテ世々種長ノ祀ヲ奉セリ
第二子雅種ハ父ノ後ヲ承継セリ即チ本宗高租二神忠恵子ナリ
第三子道種ハ道仙ト号ス道仙ハ学問該博ニシテ医術ニ長ス子孫世々医ヲ業トセリ道仙一男アリ名ハ善種字は茂太夫ナリ善種女ヲ生ムモノ三人ニシテ一男アルナシ乃チ従兄通直ノ第六子香伯ヲ養ヒ而テ妻ハスニ女ヲ以テス因テ之ヲシテ其ノ後ヲ承継セシメタリ長女某ハ安岡宅右衛門ニ嫁通セリ次女某ハ二神守種ニ嫁通セリ季女其ハ即チ香伯ノ妻ナリ香伯一女ヲ生メリ名ハ某ナリ内海浦村正實藤良蔵ニ嫁通セリ香伯ノ後裔は復タ見ル所ナシ薑レ其ノ血胤絶断シ享祀セサルナル□

第四子正昭字ハ傳右衛門ナリ出テ中川村正西某ノ後ト為レリ正昭ハ治民ノ村アリ営時能吏ヲ以テ称著セラレタリ
長女某ハ北宇和郡下灘浦村正赤松忠兵衛ニ嫁通セリ
第五子種通字ハ清之丞ナリ種通ハ天性温厚ニシテ文学アリ天和年間伯兄正種別ニ家基ヲ城辺村ニ開クニ當リ種通悉ク兄ノ遺財ヲ受タリ乃チ座ヲ留マリテ轉従セス以テ篤ク心ヲ治産ニ書セリ因テ大ニ家ヲ富マスト云フ種通一男アリ名ハ種敏字ハ清之丞ナリ種敏二男ヲ生ム伯ハハ清助ナリ種正字叔ハ盛種字ハ十兵衛ナリ世人盛種ヲ呼テ猿猴十兵衛ト称ス□シ其ノ家ニ水獣贈ル所ノ奇皿ヲ蓄ルヲ以テ然リト云フナラン
種正ヨリ幾ハク世ヲ□テ乃チ明治年間ニ至レハ則チ緑村ニ二神精一ナルモノアリ比レ其ノ後裔ニシテ其家世ハ種通ノ祀セリ而テ乃チ所謂水獣献皿ナルモノハ精一ノ家ニ宝蔵シタリ
季女某ハ身体長大ニシテ勇力絶倫ナリ世人同スルニ小板額ヲ以テセリ小板額対偶ヲ□テ軽シク人ニ嫁スルヲ肯ハス固ク節ヲ守テ父ノ許ニ在リ一日兄正種ヲ城辺ニ問フ皈路ニテ緑水ヲ澄レリ水涯に怪獣二頭アリ将サニ蠱惑シテ害ヲ為サントス小板額大喝一聲真ニ捕テ之ヲ縛セリ因テ将サニ二頭ヲ併ハセテ之ヲ格殺セントス是レニ於テ怪獣涕泣シテ罪ヲ謝スルモノノ如ク然ルナリ小板額乃チ厳ニ教戒ヲ加テ之ヲ殺サザルナリ而テ縛ヲ□テ之ヲ遣放セリ怪獣即チ感謝シテ去レリ後チ三日ノ夜怪獣奇皿十枚ヲ帯テ来リ乃チ之ヲ小板額ニ興テ日ク貴女ハ神武ニシテ不殺ナルモノナリ□テ大恩ニ報スト言畢ツテ？チ失セテ復タ見ヘス比レヨリ厥ノ後チ世人小板額ヲ呼テ婆猿公大ト婆ノ称セリ猿公大勇名郷□ヲ震動シタリ十奇皿ハ所謂水獣献皿乃チ是レナリ
第六子正家字ハ武右衛門ナリ正家精悍ニシテ心ヲ農事ニ用フ乃チ資産ヲ分ッテ別ニ一家ヲ為ス正家ニ一男アリ名ハ種則字ハ孫右衛門ナリ種則ノ子孫相ヒ継テ明治ニ至レハ則チ廣見村ニ二神新三郎ナルモノアリ比レ其ノ後裔ニシテ其家世ク正家ノ祀ヲ奉セリ

役員のつぶやき☆☆☆

畑中二神氏伝承

澤田　良子（りょうこ）：口伝
二神　浩三：記録

「海の民ふたがみ」第５号、29～34頁で、畑中二神氏の系譜家紋紹介をしましたが、畑中二神氏本家（二神俊一氏宅）に遺されていた一枚の紙片＜嘉永５年（1852）壬子文月（７月）24日付＞＜平井古市園の武智豊前守藤原朝臣盛陳から畑中村の二神豊助に宛てた書状＞によれば、

「元祖　風早城主　二神豊前守　嫡子　二神隼人助　次男二神孫右衛門　其末」

とあります。即ち、二神氏７代目隼人助通範の弟として二神孫右衛門が記されています。さらに続けて二神氏の末孫として久米郡畑中村に居住した５名の人物（氏名なし）がいて、その次に二神氏佐右衛門常勝、同豊助常似（つねのり）（書刊写）と記されています。従って、常勝より五代前（文左衛門より四代前）から畑中村に居住したらしい。（別紙、系図参照）

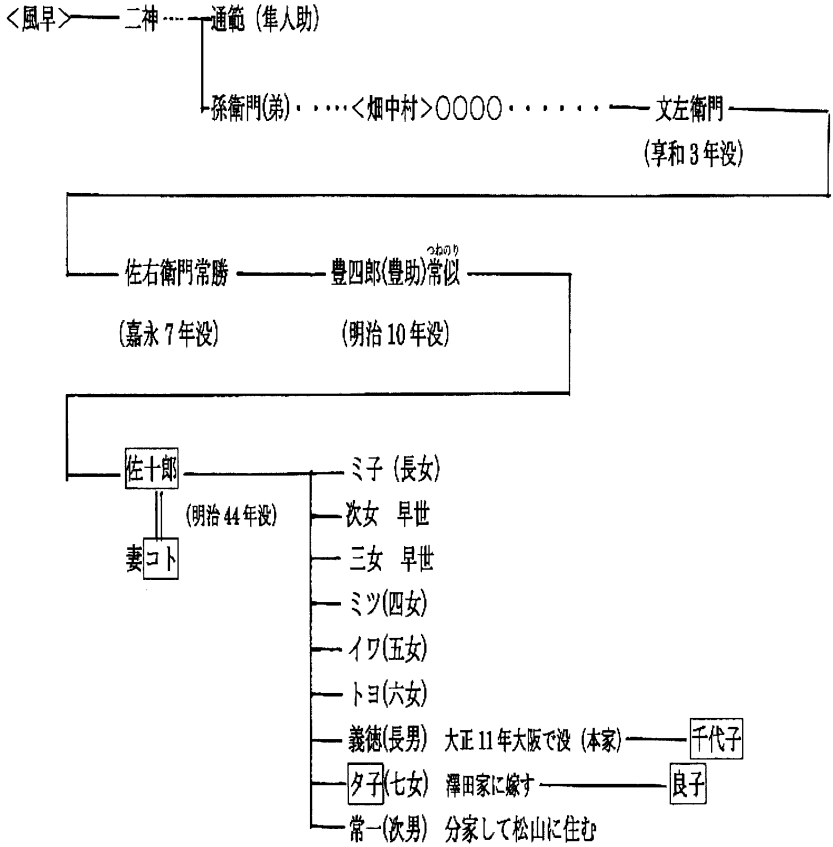
当時の畑中村は一寒村であり、庄屋筋でもなかった畑中二神氏が一体何を職業としていたのかが大きな疑問でした。そんな時、平成18年に東京浅草のお寺で二神佐十郎と妻のコトの７女澤田タ子（たね）さん（註：澤田良子さんの母上）の法事が行われた。その席上で澤田良子さんから、次のようなお話を伺うことができた。

「母（タ子（たね）さん）の存命中に、母から聞かされていたことは、佐十郎さんは刀鍛治をしていました。だから、庭を掘ると古い刀が何本か出てきました。しかし、田舎芝居の巡業が畑中にやってきて小屋をかけました。佐十郎さんの夫人コトさんが、芝居の役者から乞われるま

まに何本かの刀を貸しました。ところが、その刀は役者と共に遂に返ってきませんでした。」とのことである。

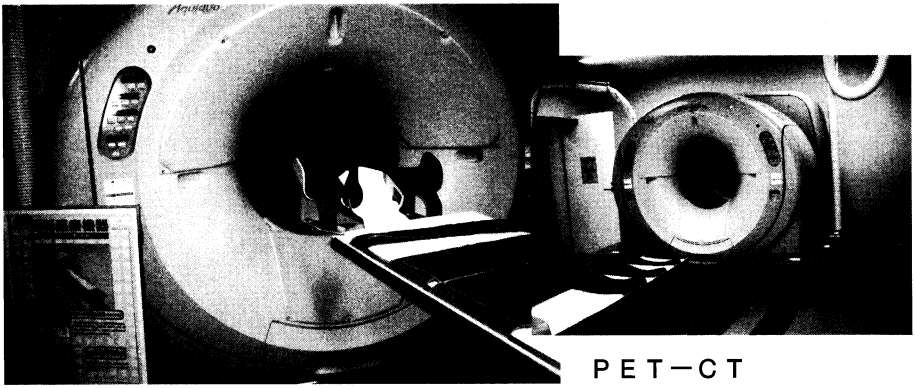
即ち、畑中二神氏は、明治のある時期に刀鍛治をしていたという伝承を得た。このことは、俊一さんの母上千代子さんの記憶（小さなものを作る鍛冶屋説）とある程度は一致するが、良子さんの話のほうが具体性があり、信頼性があると思える。良子さんの記憶力は特に優れてはいるものの、その話を裏付ける物も文書も無いので伝承としておく。

【近世の畑中二神氏の略系図の抜粋】



ペットで命びろい

二神　俊一



ＰＥＴ－ＣＴ

１　ＰＥＴ－ＣＴ

約２年半前、松山市内にもやっと、最先端装置の「ＰＥＴ－ＣＴ（陽電子放射断層撮影装置）」が導入された。

１つは、愛媛県立中央病院内の「愛媛ＰＥＴ－ＣＴセンター」で平成18年３月に開設。もう１つは、その翌月、「四国がんセンター」内に設置された。当時、愛媛県では松山市に２箇所あるのみだった。

四国がんセンターは、市内中心地の堀之内から、南東約10kmの南梅本町へ移転オープンした。自宅から近いこともあり、内覧させてくれるというので、見学がてらワイフと視察に行ってみた。

ＰＥＴ－ＣＴは、簡単にいえば、「外来レベルで、簡単に細胞の働きから癌を発見できるという、最先端の画像診断装置である」とのこと。

私も、人間ドックは、それまで、ほぼ毎年受けていたが、当時、還暦を過ぎたこともあり、また、幼なじみの同級生が、舌癌や心筋梗塞などで、相次いで他界したこともあって、一度ＰＥＴ－ＣＴ検診を受けてみたいと思っていた。仕事が落ち着いた頃に検査の予約をいれて

みたら、結構、混んでいて、10月の中旬に予約が取れた。

検査そのものは、注射をされた後、写真のような装置に入り、全身をスクリーニングするだけで、大した負荷もなく数時間で終了。夕方に、簡単な結果の説明を受けた。

医師から『①前立腺癌の疑いがある。②肺癌の疑いもあり。』と、あっさり、告げられた。私は、「えっ!?」と絶句したままで、次の言葉が出なかった。医師から、「2週間くらいで正式な検診報告書を送付しますから。」ということで、その日は、ひとまず帰宅。南梅本町から、平井町は近距離であるが、随分遠方に感じてしまった。

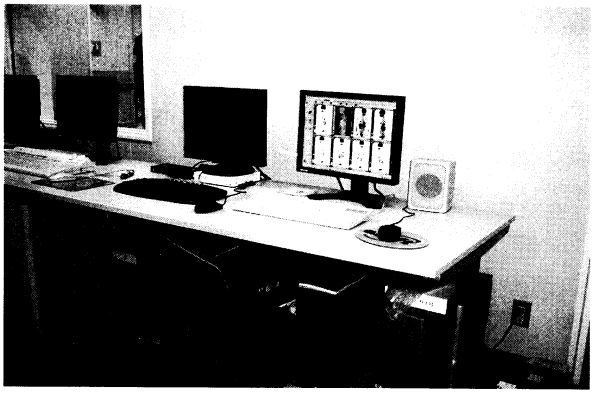
帰宅して、早速、パソコンで前立腺と肺の癌について調べてみた。前立腺癌は、確か、今の天皇陛下もかかったと記憶しているが、進行が比較的遅いらしいので、焦らなくてもいいが、肺癌については結構厳しい内容の記載が多くあったりして、ホームページをみてから、よけいに気分が滅入ってしまった。

平成18年10月下旬、正式な報告書が届いた。コメントには『①前立腺癌を否定できません。泌尿器科受診をお勧めします。②両肺上葉にガラス状の小陰影を認めます。前がん病変あるいは悪性度の低い肺癌も否定できません。呼吸器内科受信をお勧めします。』と明記されていて、専門用語もあり、難解であったが、流石にショックであった。

ほんの軽い気持ち、ひやかしのつもりで、ＰＥＴ－ＣＴを受けてみたのに、あまりにも、簡単に「がんの疑いがある」なんて告げられても、心の準備ができていない。ましてや、私自身、咳もでないし、タバコは今まで、飲んだことないし、肺癌なんて全くの想定外であった。

一瞬、目の前が真っ暗になったが、当時、実母は96歳、軽度の認知症の傾向はあるものの、介護しながら、自宅からデイサービスに通っているし、次女は結婚式を控えているなど、「まだ、死ぬのは早い」。「癌の疑い」は晴らすに限る。とにかく、泌尿器科や呼吸器内科を受診して白黒はっきりしなければ……家族にも事実を伝えたが、やはり落ち着かない。誰も、まさか、自分が癌になるとは、思いたくないも

ので、悶々とした感じであった。



「これまで、がむしゃらに仕事一筋（？）で生きてきたことは、一体なんだったのか？」「今後どうなるのか？」不安が増幅してきて頭がパンクしそうになった。しかしながら、一方では、「未だ、癌と診断されてはいない!!」「ひょっとしたら、何かの間違いかもしれない」などと妙に納得してみたり、「ＰＥＴ－ＣＴの確度はどうなんだろう？」などと、いろいろ思いあぐねた。

前立腺の方は、ＰＳＡ検査値も低いし、触診の結果、あまり問題なさそうなので、経過観察ということで、肺に焦点を絞ることにした。白黒はっきりさせるには「生検」といって、手術をして細胞を取って病理検査するしか正確な判断ができないらしい。

その後、半年後・一年後に定期検査してもらったが、変化が見出せなかった。「ひょっとしたら、間違いだったかも？」と思ったりもした。その間に日赤でセカンドオピニオンを受けたが、がんセンターと同じ見解であった。

それから、半年後の検査で「ちょっと変化が認められる」……と言われ、自分なりの決断をせざるを得なくなった。

日頃、人間ドックでお世話になっている松山市民病院でサードオピニオンを受け、先輩の推薦もあったので、「生検」をしてもらうことにした。

2　ＶＡＴＳ

私の場合、生検は、胸を開けて行う手術ではなく、ＶＡＴＳ（胸腔

鏡補助下手術）といって、３箇所に小さな穴を開けて行うらしい。全身麻酔をして行うので入院が必要とのこと。両方の肺なので、右肺を手術して１週間後に左肺をするので、２週間くらいの入院になる由。

夏休みを前倒しでもらうことにして、７月３日入院して手術の準備をした。

翌日、生まれて初めて全身麻酔による手術を受けた。担当主治医は岡山大学医学部卒のＵ先生で、全てをお任せした。手術にはワイフと長女、姉達が立ち会ってくれた。

13時から手術開始し、15時頃にはワイフが主治医によばれ、あっさり、「癌でした」「もう、切除したから大丈夫です」と告げられた。しかし、私は、その時、摘出した現物にはお目にかかっていない。ワイフは、先生から、見せてもらった時「なんか、タラコみたいなものだった」と、後で聞かされた。

私は、17時頃、麻酔がさめて、気がついたら病室にいた。17時半ごろ、先生が、病室へきてくれて、「二神さん、わかりますか？癌だったですが、取ったから大丈夫です」と言ってくれました。まだ、頭が、ボーッとしている時だったが、「やはり、というか、本当に癌だったんだ」と、ぼんやり考えていた。（その時は、あまりショックはなかった）

ＶＡＴＳの後の回復はきわめて早く、傷口は絆創膏で貼ってあるだけで、数日でシャワーもＯＫで、病院内を歩き回って、傍目にはどこが悪いんだろうといぶかしがられたほどである。その後、左肺の手術も受けて、４日後には退院し、１週間後には、仕事に復帰できた。

左右の横腹に、３箇所ずつ、小さな傷があるだけだが、内部では、なにか、引っ張られるような痛みがあったので、しばらくは過激な運動は控えていた。が、夏休みに東京から孫達が帰省した時、伊予市の五色浜で、孫につられて、おっとり刀で、試してみたら、なんとか泳げた。

最初は、車の運転も凸凹道は、ちょっと傷口に響いたりしたが、そ

のうちなんとも無くなった。

もし、ＰＥＴ－ＣＴを受けていなかったら、普通の、健康診断では、今でもまだ、発見されていないだろう、と思うと「ぞっと」する。

今日では「早期発見、早期治療」であれば、なんら「癌も怖くない」といわれている。

私の場合、ＰＥＴ－ＣＴで偶然とはいえ、小さい病巣を発見でき、思い切って摘出してもらったことは、不幸中の幸いであろうか？

それにしても、私は、タバコを飲まないのに、なぜか？と思ったりした。

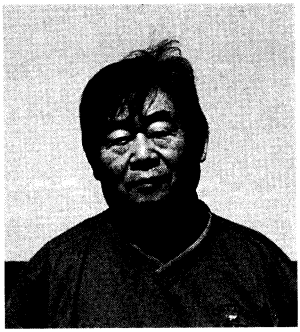
受動喫煙も結構影響がある。とか、ストレスもよくないとか……いろいろ言ってくれたりするが、さて、原因はなんでしょうか？

皆様も健康にはくれぐれもご留意いただきたい

平成20年11月27日

二神栄三氏を偲ぶ

中部関西支部理事　二神　宏介



突然ご家族から、栄三氏が９月１日に亡くなったとの訃報を頂きました。８月24日に神戸海洋博物館で二神島に関する絵と文の作品展があり栄三さんにお誘いをかけたところ体調不良とのことでした。元気になったら電話するとのことで、元気な声を聞けることを楽しみにしていましたのに、突然の訃報に愕然としました。

９月14日に久藏さんと二人、仏前でお別れの挨拶をした際、奥様から病床日記を見せていただきました。亡くなる寸前まで「二神系譜研究会」のことを気にかけておられたことに涙しました。

栄三さんは「土佐のおんちゃん」「いごっそう」の精神を持ち男気

好々爺の栄三さん　出逢いと別れ

（久蔵さんと仏前で）

がありました。高知の小才角を誇りとする郷土愛の強い方で、折に触れ小才角二神氏の説明をされていました。二神系譜研究会中部関西支部結成に関しても、常にリーダーとして会員の皆様をリードし、前向きで楽しい中部関西支部を作ることが念願の人でした。

今日の素晴らしい中部関西支部を設立された「栄三さんを偲ぶ会」を久藏さんと二人で思い立ちました。支部総会を兼ねながら、「栄三さんを偲ぶ会」を‘08年11月30日（日）に、なんば「花かれん」を会場にして正午に開催しました。松山から浩三会長、豊田渉さん、北海道から敏郎さんがお忙しい中にもかかわりませず、駆けつけて下さいました。支部会員有志及びゆかりの人で総計11名による、偲ぶ会になりました。

最初に、守さんの音頭で栄三さんへの献杯の後、栄三さんの奥様さち子様より、お礼のご挨拶を頂きました。

支部総会として、浩三会長からご挨拶を頂いたあと、湯築城資料館関連の講演会のお話し（英臣事務局長講演のレジュメを全員に配布）がありました。時間の都合で、豊田渉さんから詳しくは「海の民ふたがみ」に掲載される旨説明があり、支部総会は終了しました。

引き続き、「栄三さんの偲ぶ会」を開催しました。浩三会長から故人への思い出話、参加者皆様から栄三さんの思い出話、会員の皆さま加齢による健康の話、いろいろな楽しい話題で、写真参加の栄三さんもニコニコと皆の話を聞いて楽しまれた事でしょう!!

いろいろ思い出話は尽きませんでしたが、最後に久藏さんから終了のご挨拶があり、3時間の会合はあっという間に終わりました。（今回は、あつかましくも、栄三さんを偲ぶ会をメインに、支部総会、支

部忘年会を合わせて行いました。)

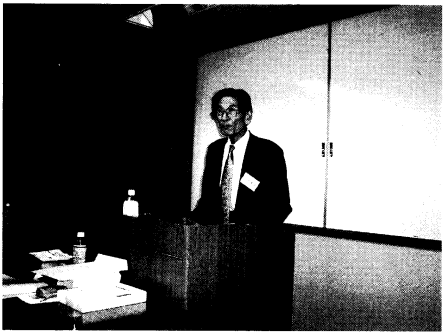
栄三さんは、二神系譜研究会中部関西支部発足に一人走り回り、今日の二神系譜研究会中部関西支部の基礎を作られました。

私も最初、電話をいただき「会に入らないか」と熱心に誘われました。少しは二神氏に関する興味があった為、第一回設立総会（サニーストンホテル）に、冷やかしで出席しました。松山からも現役員の方が多数参加され、今日に至っています。

「遠くの親戚より近くの他人」ではありませんが、会合では全員二神さんですので、名前を呼ぶことですぐに近親感ができ和やかな会が出来ました。一度は行ってみたかった二神島訪問ができたのも、栄三さんのおかげと思っています。

二神系譜研究会中部関西支部総会の場所も、常に感動する場所を優先に、奈良学セミナーハウス、日本のピラミッドといわれる図頭の見える飛び火野奈良会場、秋色の美しい古都散策等楽しいイベントも考えて下さいました。

タイトルのお写真は、昨年１月の支部新年御礼会を今回の会場で行った際のものです。日頃は真面目で謹厳実直な表情でお話しをされますのに、当日は仙人のような感じで優しく、ゆったりとされたことが思い出されました。栄三さんも大変満足そうで、来年も計画していましたのに、偲ぶ会になって残念です。



支部総会での挨拶される栄三さん

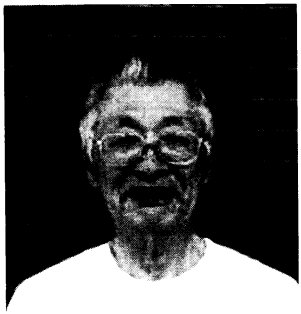
支部総会出席者の皆様と

いろいろ思い出は尽きませんが、栄三様のご冥福をお祈りします。

栄三さんを「偲ぶ会」にご参加の皆様　平成20年11月30日撮影

「えーちゃん」「まーちゃん」
栄三氏を偲ぶ

二神　政幸



今日は、栄三氏が他界して３ヶ月目の命日に当たる。栄三氏と私は昭和５年生まれの同級生であり、幼ななじみである。栄三氏の祖母と私の祖父が姉弟で、一族の中でも最も近い親族で、家も30mくらいのところにあり、幼い頃より「えーちゃん」「まーちゃん」の愛称で育った。

小学校卒業後は別れ別れになるが、５年程して再会することになる。それは私が教員になって初めて下川口小学校に赴任した時である。その時、栄三氏は下川口の義兄の家で建築の仕事をしていた。久々の面会であった。その頃の日本は、戦後の復興の槌音が聞こえ始めた頃であった。

ある日、栄三氏より電話を受け行ってみると、下川口の町史（村史）の収納箱を作っていた。その時町史はその場に無かったが、栄三氏は一部目を通したところがあったようで、その内容を話してくれた。大地震による下川口海岸の変動など詳しく書かれていたという話だった。思うにこの事が、彼の歴史に目を開く第一歩になったのかもしれない。

私は６か月間で小才角小学校に転勤になったので、再び栄三氏とは別れることになる。しかし、３年ほどして栄三氏も小才角に帰り、故郷の青年団などで活動した。

栄三氏が、二神宗家（本家）の改築を始めたのもその頃であった。家には槍や長刀が飾られ、殿様が泊まったという部屋など普通の民家とはだいぶん違ったところがあり、当時は少し惜しい気持ちがしたが

江戸時代の建築で仕方なかったのだろうと思った。

宗家（本家）は栄三氏の姉が主人だった（夫は死亡）ので、栄三氏は古くから伝わる古文書や絵画・屏風・槍・長刀等、宗家にしかない品々を自由に調査することができたわけである。その後の転勤により私は小才角を出ることになる。栄三氏も本家の仕事が終わってから、希望を抱いて上阪したということを後で聞いた。

それから約50年、二人は会うこともなく長い年月が続いた。そして夢のような再会を果たすのが「二神系譜研究会の準備会」の前夜祭、ホテルのロビーでのことだった。70歳を過ぎた老人が、「えーちゃん」「まーちゃん」と呼び合いながらの会話が進んだ。この時の感動は、いつまでも忘れることはできない。

このようにして1999年の準備会から翌年の第一回総会を経て毎年、栄三氏と私は再会を繰り返した。ホテルもいつも一緒。会うたびに故郷の話、同級生の消息など、夜を徹して語り合ったものである。その

小才角の風景

間、栄三氏より系譜についての資料を通じていろいろと指導や助言をいただいた。また、研究物として「伊予の中世年表Ⅰ」「伊予の中世年表Ⅱ」、懐良親王にまつわる「八代宮」の研究、また、小才角二神家繋書のコピーの現代文章化、小才角二神家に関わる年表など、系譜研究会の発展に盡した功績は大きい。

毎年会っていた栄三氏が前夜祭に姿を見せないときがあった。理由を尋ねると「体調を崩して参加できない。理事も退いた」との話であった。しかし、私は彼がたびたび腰の痛みを訴えていたので、腰痛がひどくなったとばかり思い、あまり気にしていなかった。今回の訃報は、経過も知らないし年賀状も交わしていたので、まさに青天の霹靂であった。

奈良の奥様やご子息との面識もなく、私も宿毛市に住んでいるのでお会いする機会は無いと思うが、立派なご子息たちがおられるとのことなので、栄三氏の後を継いで二神系譜研究会のために頑張って欲しいと思います。

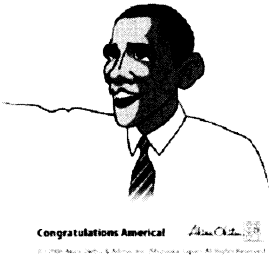
最後に、栄三氏のご冥福をお祈りすると共にご家族のご多幸を祈念して終わります。

「えーちゃん、ありがとう」合掌

（2008年12月１日）

OUT、IN

二神　重成



2008年も漸(ようや)く暮れようとしている。後世の史家は、この年をどう位置づけるだろうか。ともかく、次期アメリカ大統領オバマ氏が言ったように2008年は大きなChange（変化）の年として記されるだろう。あるいは少なくとも変革の端緒となった年となるに違いない。変革の転換点、経済減速の最終点と思しきものが、未だ、しかと見えてきていないのが不気味でさえある。(11月24日現在)

かつてワシントンポスト紙は、年末になるとOut, in（アウト、イン）と題する特集を組んでいた。政治・経済の予想のみならず、思潮や流行の来し方行く末の観測にも及ぶ。

この一見、便利なフォーマットに倣(なら)って、85歳を超した旧戦中派の１人が歎息混じりにつぶやくこと以下の如しである。

OUT	IN
化石燃料	自然のエネルギー
競争	共生
マインド	ハート
マネタリスト	ケインジアン
拡大	求心
ディジタル	アナログ（一見逆）
所有	リース
植民	宇宙ステーション
経済学	生物学

科学	哲学
数	質
速度	経過
ヨーロッパ	グローブ
陸	陸と海
国民国家	地域（島であることもある）
農民	百姓（網野史観に依る）
人文	総合
物理学	物理学
国家	（されど）国家

国家は擬制であり、しかもバーチャルな実態でもある。今のグローバルな金融資本主義の危機が最後にすがりつくのも税金であり国家予算ではないか。

伊予吉田藩と忠臣蔵

二神　久蔵

毎年、暮れになるとどこかで「忠臣蔵、赤穂浪士」が、歌舞伎、映画などで話題になる。播磨赤穂藩主浅野長矩（通称：内匠頭）と伊予吉田藩主三代の伊達村豊（通称：左京亮）が吉良上野介指南の元で、江戸城内で朝廷接待役中、江戸城本丸御殿松之大廊下で吉良上野介が、旗本梶川与惣兵衛頼照と儀式の打ち合わせ中、突然、浅野内匠頭が、「この間の遺恨覚えたるか」と、脇差で切り込み、殿中で刃傷に及び、近松門左衛門によって物語りは作られて行く。

物語と歴史は違うので、時の流れに竿を挿すつもりは無いが、元宇和島藩の領民として少し口を挿みたい。

初代宇和島藩主は、仙台藩主独眼の伊達政宗の長男秀宗が徳川家康に嫌われて本家仙台藩60万石を継げず、伊予宇和島へ10万石で放り出された。その不満が騒動を起こし、父正宗の逆鱗に触れ秀宗は切腹と成り掛けたが、秀宗の正室の父彦根藩主井伊直政の口添えで事は収まった。秀宗も反省し、以後藩政に力を注ぎ５男の宗純に３万石を分地し、伊予吉田藩をつくる。

この吉田藩３代目、村豊（左京亮）が近松門左衛門によると「赤穂の殿様浅野内匠頭は潔癖で正義感がある。伊予の伊達左京亮は吉良氏に賄賂を贈り卑しい殿様」と物語『忠臣蔵』が出来上がっていくが、元領民として少し汚名を晴らしたい。

映画「忠臣蔵」（1958年）より

元禄14年（1701）２月４日に将軍綱吉は、江戸下向が予定されて

いた東山天皇勅使と霊元上皇院使を接待するため、勅使饗応役として播磨赤穂藩主浅野内匠頭、院使饗応役として伊予吉田藩主伊達左京亮を任じた。二人の指南役には、高家筆頭格の吉良上野介義央が任じられた。このとき、吉良家へ伊達左京亮が挨拶に伺うときに、黄金百枚、絵画などを進物したのに対し、潔癖な浅野内匠頭は「鰹節２本」しか贈らなかった為、吉良上野介の不興を買ったと、歌舞伎、映画、テレビなどでは通説だが、「鰹節２本」とは大名の身分として余りにも失礼で、まず「鰹節２本」だけの進物などありえない。進物即ち賄賂とは、現在と当時では時代感覚が違う。

浅野内匠頭は、17年前の天和３年（1683）にも勅使饗応役を任じられており二度目で、内匠頭や家臣が役目に不慣れだとは思えない。また、それ相応の進物等も礼儀作法として家臣が行っているはず。進物を贈ることは当時としては当たり前のことで指南料、挨拶のひとつで、別に卑しまれることではなかったとも思はれているから、賄賂ではないと思う。

伊予吉田藩だけが賄賂を贈る卑しい大名として、歌舞伎・映画・テレビ等で騒がれるのが通説だが、（物語には正を引き立てるため、必ず悪が存在する）当時としては、黄金百枚は大名の贈り物として別に卑しまれることではない。現在では諸説があるようだが、幕府にとって最重要な朝廷との儀式を台無しにする行為は許されることではなく、浅野内匠頭の乱心そのものである。刃傷するにしても、遺恨があるのなら役目を終えた後に果たせばよいのであって、場所柄もわきまえない殿様だと思う。そのため多数の家臣を死なせ、家族を路頭に迷わせている。領主たるものの行う事ではない。

江戸城松之廊下で「この間の遺恨覚えたるか」と歌舞伎等では叫ぶが、幕府の取調べでは（多数の者が現場に居合わせて内匠頭を取り押さえている）その事実はなく、ただ「喚（わめ）きながら斬りつけた」としか記されていないとされている。

浅野内匠頭の江戸城内刃傷事件は、理由など無く、吉良上野介への

遺恨なども無く、最近の諸説では吉良氏が偶然居ただけで誰でもよく、精神異常による突発的・衝動的な行為であった可能性もあるとされる。赤穂藩内においても、内匠頭は短気で衝動的で精神的持病があると言われていた。現代から見ると、精神分裂症ではなかったかと言われている。

刃傷事件の真相は、幕府方の取調書によると内匠頭が遺恨を主張したが、その内容が記されていない。詳しく取り調べなかったことはまず有り得ないので、(幕府目付役の多門伝八郎重共と近藤平八郎重興が取り調べた) 幕府の面子をつぶした大事件であり内容が支離滅裂であるため、幕府を憚って削除された可能性があるかもしれない。対、朝廷への事件だから、幕府が「憚った」と思う。

よって刃傷事件の真相が謎に包まれたままである。しかし、刃傷事件の原因がはっきり分からないからこそ、いかようにも解釈されてこの事件を元に、忠臣蔵・赤穂浪士として一般受けするように書かれ脚色された物語が出来上がったのである。また、それが人気の衰えない秘密だと思う。

お伽絵本「忠臣蔵」より

通説を払拭するのは、長い物語の歴史があるので難しいが、単純な話のほうが大衆には受けやすい。最近では、テレビ・映画での水戸黄門、男はつらいよ等、動機は如何であれ一種の犯罪行為である。いつの時代でも、犯罪者を大衆はヒーローに仕立て上げる。これを大衆受けするように近松門左衛門が、浅野内匠頭をヒーローとして物語を仕上げたのではないかと思う。

江戸時代は瓦版、現在はテレビ・週刊誌・新聞までのマスメディアが人気取りのため、今も昔も犯罪者をヒーローとして仕立て、祭り上げてしまう。江戸時代の瓦版はともかく、現在のマスメディアはその無責任を痛感していただきたい。

申すまでもありませんが、あくまで赤穂の殿様浅野内匠頭のことであって、討ち入りの大石蔵之助以下の家臣は忠義心からの敵討ちで、当然避けられない行為であり、尊敬されるべきです。

参照：大仏次郎著「赤穂浪士」、宇和島史等

一期一会

二神　亮郎（あきよし）

『茶湯一会集』の中で、彦根藩の大老・井伊直弼が茶の湯の会で使った言葉で、「人と人との交わりにおいてその瞬間の気持ちを大切にし、再びかえってはこない貴い現在を、自分を生かしきり、心をつくして交わろう」と述べています。

私にとって、二神系譜研究会こそ、この出会いの最たるものと考えます。相手を思い敬いの心で接すればその心が相手に通じ、相叶うことができる。人間関係の極意を言い表した大変結構な言葉としてよく使われます。其の反面、非常に難しいことで、今の世の中に一番欠けている部分ではないでしょうか。

今年は、奈良の栄三大兄、小学校の恩師小川先生の逝去。猪会（昭和10年生まれのゴルフ倶楽部の仲間）のメンバー、市川・永田両君の旅立ち、おまけに数人も大病に犯され歩行困難。人間の命の儚さを感じています。

６月には母を亡くし、10月に納骨を済ませました。その際、小才角の実家を取り壊しました。百数十年経った家は、人が住んでいないと崩壊の一途。雨風に耐えられない惨めな姿になっていました。数百万円もかけて処理する価値のある家ではありませんでしたが、余りにも哀れな姿では、先祖代々がこの場所で生活をしてきたという思い……。しかし、私には、田舎に帰る気持ちも予定も起きません。名古屋への帰化人です。

母の法事を済ませ、先祖の墓、両親の墓に手を合わせながら、「これで良いのだろうか」と思いつつ……。どうしようもない自分の無力さに、末弟（敕吏）にすべてを委ねるしか仕方がありませんでした。

先祖の墓は、自分の山とはいえ、周囲は大木となり茂みはどうしようもなく、眼下に開けてよく見えていた太平洋は全く見えません。近い将来、墓参への山道さえどうなることでしょう。(英臣さんには、一度、墓参へご一緒いただきましたので、凡その状況は想像できるのではないでしょうか。)

我が家の仏壇にて先祖代々の位牌をお祈りするだけが、先祖供養の手段となりました。もうすぐ金婚式を迎える病弱な老妻と二人で、自分たちの没後を考えなければいけない時期が来ています。

でも、暗い話しばかりではありません。先週、小学生の孫達の学芸会を見てまいりました。大声で歌うようなセリフ姿。真剣な顔をして弾く未来のピアニスト姿。舞台を端から端まで、何度も何度も転んでニコニコしながら逃げ回るカイゾク姿、どれも楽しい思い出でした。

子育てが終わってしばらく経つのですが、いま孫育て真っ最中の感じです。いや、遊んでもらっているのかもしれません。本人たちは、友達の一人と思っているのでしょう。

4人の孫たち　後列：茉莉永（4年生）　帆菜（3年生）
前列：遍理（1年生）　滉（年長組）

運動不足のせいで、朝起きて体中が痛く、暫く「西式健康法（註1）」が必要です。体力的にも限界が感じられますが、まだまだくたばる訳にはいきません。まだ、ホールインワンをやっていませんし、何といってもエイジシュートができるかもしれません。その体力だけは、温存したいと思います。

ぐだぐだと愚痴話しを投稿するなど、不景気と寒気のせいですのでお許しを。暖冬のほうが私としては有り難く

「国安く　冬ぬくかれと　願ふのみ　　虚子」の心境です。

皆様も「一期一会」のご縁のある方ばかりです。

いつまでもお元気でご自愛ください。またお会いできるよう祈っています。

平成20年11月小雪

註１：西式健康法……故西勝造氏による昭和２年に公表された健康法。
　　人間も動物のように生活をすれば病気をしないという考え方。

新米宮司奮闘中

二神　良昌（よしあき）

「紙垂（しで）注連縄用・〆石用・拝殿用・神殿用・大麻用・玉串用・神輿装飾用全部で７種類５社分ＯＫ。冠・装束・祭典祝詞・お旅所祝詞・幣帛ＯＫ。神主さんの連絡・神輿の順路図・スケジュールＯＫ。神輿遷霊用手袋・覆面・衣ＯＫ。」とバタバタと準備物などを確認して、10月６日・７日に宮司として最初の秋季大祭を無事恙無く、祭典・神輿渡御を執り行うことができました。

客王神社

まだまだ先の話と思っていましたが、先代宮司の父二神通訓大人命は、大好きな満開の桜を見ながら愛媛県立中央病院の病室で、今年４月に息を引き取りました。葬儀には、二神浩三会長もご参列いただきまして、ありがとうございました。お陰さまで、沢山のご弔問の皆様に送られ幸せに高天原に昇天いたしました。

以後、父の残した手帳を見ながら、また、総代の皆さんに支えられて会社勤めをしながらの兼業宮司ではありますが、神明奉仕を続けています。

よく、「お勤めをしながら大変ですね」と言われますが、神主をするときは不思議に装束を着けたら人格が変わりますので、こんなことを言うと罰が当たるかもしれませんが、もしかしたら変身願望を満たされて還って仕事のストレスが無くなっているんじゃないかと感じます。

私の本務神社は「客王神社」と申しまして、松山市下伊台町にあります。道後白水台や道後ゴルフを過ぎてAコープ伊台の横を旭中学校のほうに曲がった山手にあるお宮です。ご祭神は、木梨軽太子・猿田彦神・応神天皇・神功皇后で建立は不明ですが、本殿の裏山から弥生式土器が発掘されていますので、かなり古い集落があったのではないかと思います。

また、言い伝えでは古くは客王子宮と言っていたようで、公文書には、「天正年間の1575年に応神天皇・神功皇后を合祀する」と記していますので、八幡神社の系統になっています。宝暦2年に雅楽殿を造営、安永4年に本殿を改築していますが、昭和25年放火によって全焼していますので、今は神殿と拝殿だけのお宮になっています。

文政11年建立の狛犬は、なかなか良い顔をしています。明治30年に書家で有名な三輪田米山が書いた客王神社の神名石と「天地一指」と彫られた〆石は、時々趣味の方が拓本を採りにきていますので、気がついたら墨の痕が残っていたりします。

そんな小さなお宮ですが、ご祭神の軽太子には興味深い話がありますので、ご紹介させていただきます。

「古事記」に書かれているのですが、允恭天皇の第一皇子、つまり皇太子の軽太子が435年に允恭天皇が崩御して、いよいよ天皇に即位するという時期に自分の妹の「軽太郎女（かるのおいらつらめ）」別名衣通姫（そとうしひめ）と恋仲、今でいう近親相姦を犯したということが判って、皇太子の座を下ろされて、伊予の湯つまり今の道後温泉の地に流されました。

衣通姫は、皇子の後を追って伊予の湯の辺に住み、その地を姫原と

いうと記して有ります。

その後、代わって皇太子になった穴穂皇子、後の安康天皇の追討によって二人は心中したという物語で、日本最初の心中事件であったといわれています。その軽太子が住んでいたのが客王子宮、現在の客王神社で皇子を祭ったといわれてます。姫が住み、二人が心中したのが松山市姫原の軽神社と伝えられ、その近くには二人を哀れんで室町時代に二人の和歌を記した「比翼の塚」が現存しています。

しかし、日本書紀には姫だけ流されて皇子は自殺したとありますし、別の説では川之江か宇摩郡に流されたという話もありますので、真偽の程は誰にもわかりません。

また、松山市の民話に

「むかしむかし、真夜中に客王神社の道端を歩いていた男が、絶世の美女を見かけて呼び止めようとしたらスーッと消えて、お社の戸がガタンと音を立てて閉まった」

という話があります。おそらくこの女神は衣通姫で、軽皇子に会いに来たのではというロマンチックな言い伝えも残っています。

昨年、京都の上賀茂神社に行ったときこの衣通姫を祭っている境内末社があり調べてみると、衣通姫は古代史の中で最大級の美人で、日本書紀の中に顔かたち優れて比べるものなし、その肌の色は衣を通って照り輝くと有り、その姿を見て世の人々が衣通姫と呼んだとあります。軽皇子が天皇の座を投げ打っても恋した乙女ですので、絶世の美人だったと思いますし和歌の神様として祭られており、一説には、日本一の美女小野小町のモデルであったとも言われています。

軽皇子も日本書紀に、「容姿端麗、見るもの自ずと愛でる」とありますので、美男美女の悲恋の物語ともいえますし、また、皇太子を陥れた陰謀説もありますので、愛媛を舞台とした古代の話として今後も調べてみようと思います。

私は、客王神社のほかに上伊台町の天神社・実川天満宮、食場町の素鵞神社、杉立の貴船神社の宮司を兼任していますので、平日は仕事、

土日はほとんど神明奉仕と、毎日忙しい中も充実した日々を過ごしております。

他の神社のお話しは次の機会ということで、二神の会の皆様のご健康と弥栄をご祈念申し上げて、筆を置かせていただきます。

客王神社のご紹介

場　所　　松山市下伊台町
ご祭神　　木梨軽太子　猿田彦神　応神天皇　神功皇后
歴　史　　建立年不明
本殿の裏山より弥生式土器が出土
始め客王子宮と称し、木梨軽太子を祀り天正年間（1573年頃）官命により応神天皇を合祀する。
宝永２年（1705）神楽殿を造営
安永４年（1775）大破につき本殿改築
享和２年（1802）本殿改造
文政11年（1828）現在の狛犬建立
明治30年　三輪田米山の書により神名石と「天地一指」の〆石建立
昭和25年10月５日　本殿全焼（安永４年から181年目）
昭和29年９月　本殿再建

木梨軽太子　允恭天皇の第一皇子（皇太子）木梨軽太子（きなしかるのみこ）
実の妹衣通姫（そとおしひめ）との近親相姦の罪で伊予に流される。
後に二人は心中したと伝えられる。

三輪田米山書の意味
天地一指　　荘子の『天地一指　万物一馬』からの抜粋と思われる。
意味は、現実の指や馬にとらわれていたら現実を越えたもの（道）は明らかにできない。天地も一本の指であり万物も一頭の馬である。

6年ぶりの二神島訪問

二神　康郎（港山二神氏）

亡母の13回忌のため、8月の終わりに娘3人、その連れ合い、孫3人を含む9人連れで東京から松山に向かった私達は、松山の親戚と合流して興居島の泊にある弘正寺で法要を済ませた。梅津寺駅近くの墓参りをしたあと、高浜港から高速船で二神島に向かった。

今回の帰省は、三女と5月に結婚し二神姓を名乗って港山二神氏を継いでくれることになった太郎君に、親戚への挨拶方々お墓や菩提寺を紹介し、更に祖先の地である二神島を見せようというものであった。私にとって二神島訪問は6年ぶりだ。

ふたがみ荘に旅装を解いた私達は、早速、ふたがみ荘のオーナーである村上さんに案内して貰い、二神氏の墓地に向かった。路地を抜け

ふたがみ荘前での家族の記念写真。
後列右から豊田渉さん、3番目が筆者、5番目が二神太郎君

て細い山道を登り、最初に出会う屋根付きの最も古い墓石を過ぎて更に登り、二神本家の末裔である司郎さんの墓に辿り着いた。見れば画家らしくパレット付きのモダーンな墓だ。

今回、特に楽しみにしていたのは二神仲次郎（種美）氏の墓参りだった。同氏の墓は司郎氏のすぐそばにある。種美氏は明治23年に港山二神氏のために二神本家の系図を書き写し、私の曾祖父にプレゼントして下さった方だ。系譜研究会の常任理事である豊田渉さんは、同氏の生前の写真や略歴書を小生のためにわざわざ送ってくれたが、それによって同氏が如何に立派な方であるかがよく分かった。

同氏は安政３年（1856年）に生まれ、明治５年（1872年）二神村戸長就任、明治25年（1892年）神和村議員初当選、明治32年に神和村議員に２回目の当選を果たしたあと由利島の業業権をめぐる高浜との紛争でリーダーシップを発揮し、明治36年（1903年）二神漁業組合設立認可を受け初代組合長に就任した。明治40年（1907年）50歳でこの世を去ったが一生独身であったようだ。そのお墓の裏面には当時の大道寺愛媛県温泉郡長が漢文で長文の賛辞を寄せられている。

翌朝、渉さんの紹介で怒和島の漁船２隻をチャーターし魚釣りに出かけた。二神島でも漁業は盛んだが遊魚船はなく漁具、船頭さん付きで怒和島の業者のお世話になった。

釣果は上々だった。疑似餌が７つ付いた竿を振って釣り針を海に降ろすとしまだい、めばる、べら（ぎぞ）、あじ、さばなどが面白いように釣れた。

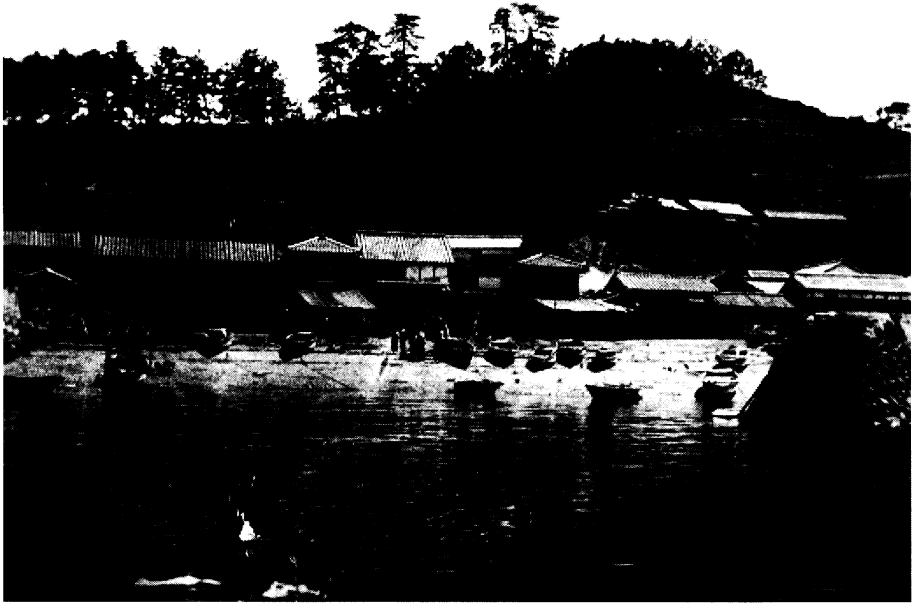
一度に７匹上がってきたこともあった。底に近い針にはメバル、次いでベラ、更にあじとさばの順で上がってくる。これには孫達や瀬戸内海を初めて見た太郎君は大いに喜んだ。釣れた魚は早速刺身や天ぷらにして食べたが大変美味しかった。孫達は来年も是非行きたいと言っている。

二神豊田ご本家の位牌から

豊田　　渉

二神島にある我が家に今年、新しい繰り出しのお位牌を作った。といっても、分家であるため、祖父・茂七、祖母・トク、妹・あつ子、父の伯父・範之と叔父・武夫と叔母・光子の６人分だ。祖父の父・徳蔵（私の曽祖父）以前のは、ご本家にある。二神島にあるご本家は、我が家の二軒向こうにあるが、無住で痛みが激しい。誰ももう帰らない。

写真：二神島



右上に３つ並ぶ家の右端が御本家、左端が我が家（年代不詳）

今年の７月27日、機会をつくり西宮市に今住んでいる、ご本家を訪ねた。先代が亡くなったとき、私は葬儀に参列できず、いつかご焼香

に訪ねたいと思っていたのである。先代は、父の従兄にあたる。今は、私より１つ年下のふた従弟が後をみている。小学生頃は、島にも帰ってきていたのでよく遊んだ。

今回、ご本家のご位牌を見せてもらった。繰り出しに、12枚の戒名札があった。曽祖父の「徳蔵」から３代前の「忠次」に遡ることができた。私が聞いているのは、徳蔵の前が助十郎、その前が十次郎、そして忠次だった。それより以前は位牌には無く、忠次の前は種行（半平）。

この種行は、故二神司朗氏によると「系図上では、種行は、私の家から出ていて、種章の叔父にあたる人のようだ」とのことだった。忠次は、文政３年（1820）に没しているから、我が家が二神司朗家から分かれ「豊田」になったのは200年くらい前になるようだ。

気になる戒名を古い順に並べてみると、次のようになる。

「寶林珠善信士」忠次（　～1820）文政３年旧９月29日没。
「観蓮珠善信女」トラ（　～1821）文政４年３月11日没。（忠次の妻）

「秋実道観信士」林蔵（～1848）嘉永元年７月12日没。註①
「秋屋妙観信女」おそめ（～1854）安政元年７月26日没

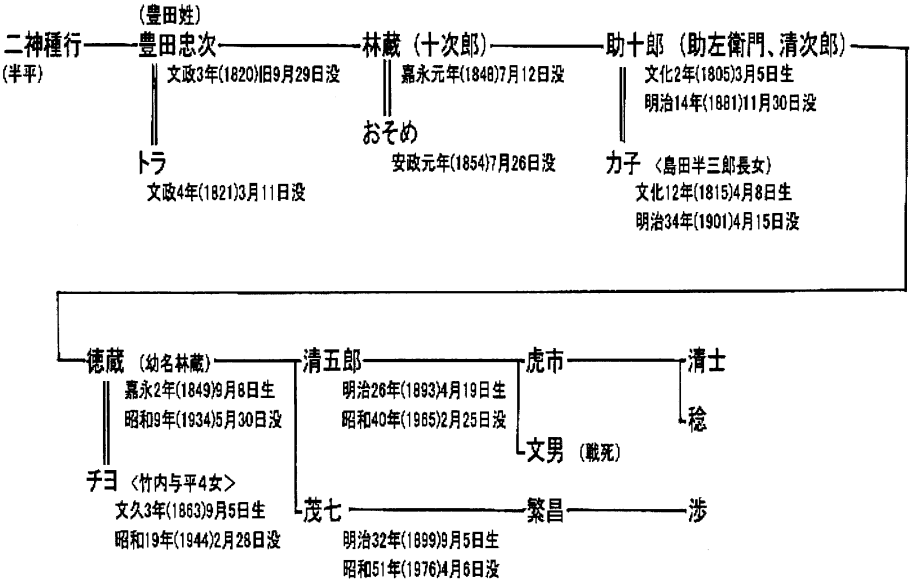
註①『壬申戸籍（明治５年）写し』では「林蔵」、『二神家末家次第』（神奈川大学日本常民文化研究所蔵）」では「十次郎」、『二神康郎宅系図』では「重次郎」とある。

「蓮華導樹禅門」清次郎（1805～1881）文化２年３月５日生。
明治14年11月30日没。註②
「蓮室妙壽禅尼」カ子（1815～1901）文化12年４月８日生。
明治34年２月27日没。

註②「清次郎」は、「助左衛門、助十郎」とも名乗った。戒名では「清次郎」だが、戸籍では「助十郎」になっている。

「徳壽榮弘禅定門」徳蔵86（1849～1934）嘉永２年９月８日生。
昭和９年５月30日没。
「徳室知保禅定尼」チヨ82（1863～1944）文久３年９月５日生。
昭和19年２月28日没。

【二神豊田家略系図】



多少、ものによって表現が違うものもあるが、現状は以上である。（参考：『二神豊田ご本家位牌』、『壬申戸籍（明治５年）写し』、『二神家末家次第』、『二神康郎宅系図』、戸籍・除籍謄本。）

今回、ご本家を訪ねたことで再確認をすることができたことが多い。私の聞いていない人物のもあり、また調べることが増えたようだ。地道な作業であるが、１つのことをきっかけにして他の系譜に大きく広がっていくようになればと思う。今後も、その気持ちを持って探っていきたいと感じた夏の１日だった。　（平成20年12月14日記）

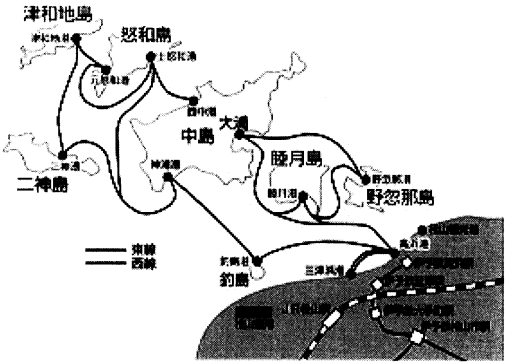
「ふたがみ」にまつわる話

二神島の近況

●定期船の運賃値上げ

平成20年10月１日から松山市の島々を結ぶ中島汽船㈱が、船の運賃を約20％値上げしました。原油の高騰が主な理由かとは思いますが、旧中島町営汽船のときから20年近く値上げをしていない状況からみると、もう限界であったのかもしれません。

航路図



●中島大浦港にはレンタサイクルがあります（1日200円）

旅客運賃表　大人料金（12歳以上）※小人料金は半額（端数は切り上げ）。

	フェリー											
高速船	三津浜	150	670	670	870	500	870	1,190	1,190	1,190	1,190	－
	－	高浜	670	670	870	500	870	1,190	1,190	1,190	1,190	－
	－	1,210	睦月	240	320	－	－	－	－	－	－	－
	－	1,210	530	野忽那	320	－	－	－	－	－	－	－
	－	1,550	610	610	大浦	－	－	－	－	－	－	－
	－	－	－	－	－	釣島	420	970	970	970	970	－
	－	1,550	－	－	－	－	神浦	620	620	620	620	－
	－	1,990	－	－	－	－	910	上怒和	290	290	290	580
	－	1,990	－	－	－	－	910	580	元怒和	240	290	580
	－	1,990	－	－	－	－	910	580	530	津和地	290	580
	－	1,990	－	－	－	－	910	580	580	580	二神	580
	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	西中

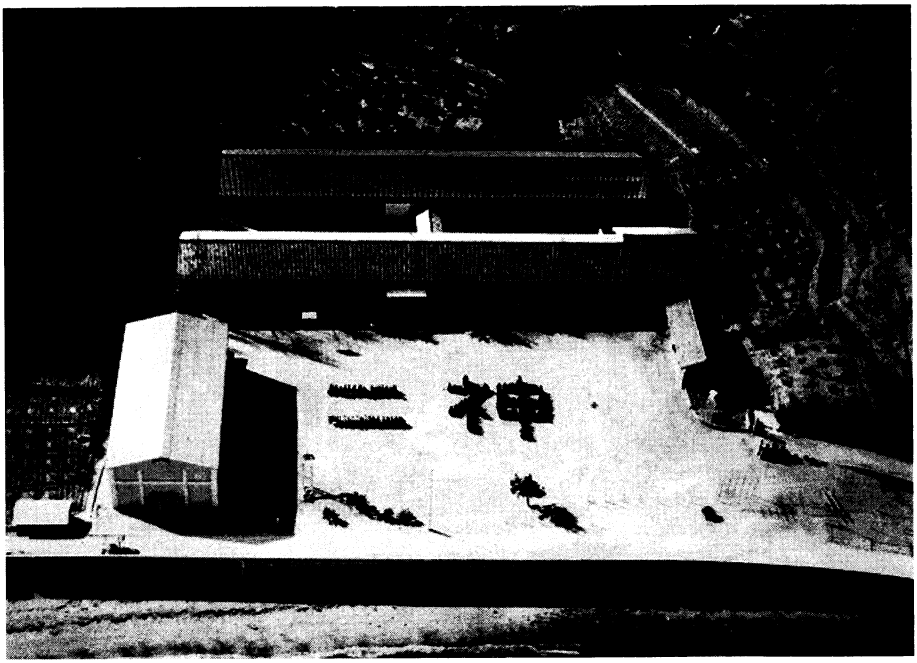
（単位：円）

これにより、三津・高浜～二神間はフェリーが片道1190円（1000円）、高速船が片道1990円（1670円）になりました。今まで、二神島から直通で三津浜で走っていた渡海船が廃止され（これは、片道500円でした。）、中島汽船の定期船しか手立てはなくなりました。

船を利用しなければ買い物も病院通いもできません。人も少なくなり利用者が減少していく中、後は更なる運賃値上げか、船便の減便しか方法は見つかりません。島の人にとっては生活航路でありますが、島外の人が島に出かけてみようというときには、二の足を踏むような現状があります。

●二神小学校休校？

平成20年度の二神小学校の全校児童は２人。３月に１人卒業しますので平成21年度からは１人だけになります。いまのところ、入学する子どもはいません。１人だけでも学校としての機能はありますが、保護者の選んだのは、中島に新しくできる中島小学校への通学です。４月から、毎日、船で隣の中島へ裕司君は通います。彼が卒業するまでの３年間、二神小学校の施設は残しておきます。この３年間で、もしかして帰ってくる子どもたちがいないとは限りませんから。この３年間が勝負です。



二神小学校（昭和42、43年ころ）

むかし話し「お船にもうし」

画　岡田　誉

いつのことか、はっきりわからんが、むかしのことじゃ。

由利島のシタバ（島の南側）の浜の沖に、一艘の船が潮待ちのために碇を下ろしたんじゃ。この船は大坂から九州のほうへ荷を積んでいってのもどり（帰り）じゃったそうな。

その夜は満月で、海は不思議なほどないじょった（凪いでいた）。真夜中のことじゃ。大由利の山の中ほどから

「もうし、お船にもうし。」

「もうし、お船にもうし。」

と鈴をふるような、何ともいえん澄んだ声が、響いてきたんじゃ。

船頭たちが、その声のほうを見たら、月明かりの下に、きれえな娘がこっちのほうに向いて、手招きしよるじゃないか。

「この船に何か用かな。」

と、船頭のひとりが問うと

「大坂まで、便をください。」いうんで、船頭たちは小舟を下ろして、小石の浜へつけたら、その娘はもう海ばたまでおりてきちょった。

船頭たちは、えらい早う、おりてきたもんじゃと、不思議に思うたんじゃが。まあとにかく娘を小舟に乗せて、沖の本船までもんて（帰って）きたんじゃ。ほいて、娘が本船に乗り移ったとたん、ドンガラガラ　ガッシャーンという、きょうとい（凄い）音がして、船がぐらぐらっと揺れたんで、皆、たまげてしもうて、いっとき、目をつぶっちょったが、ちいとないだして（少しして）、目を開けてみたら、そ

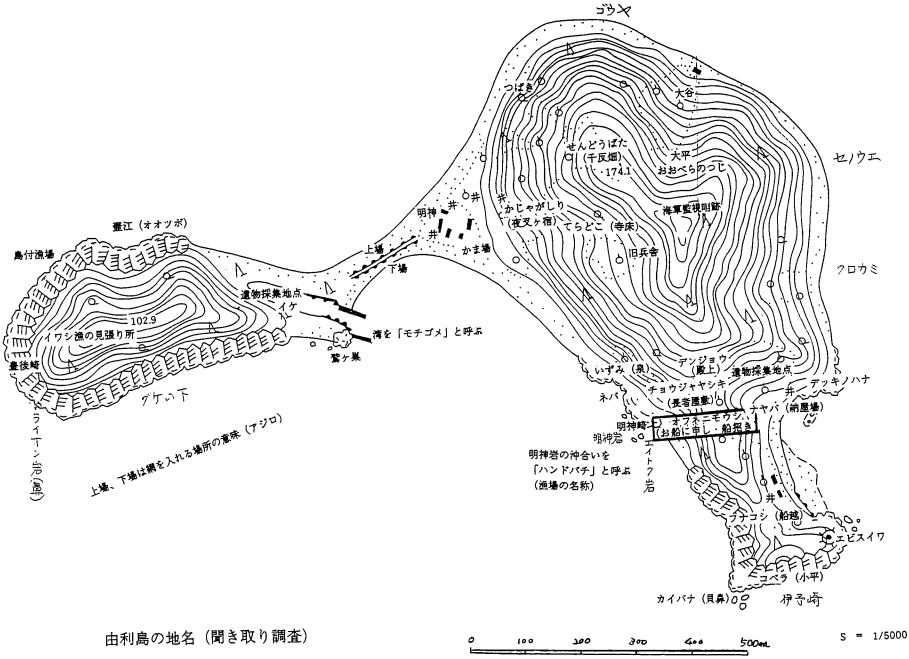
こには、娘の影も形ものうなって、娘が乗ったあたりに、黄金の無垢の大けな大けな塊があったそうな。船頭らは、何が何やらさっぱりわからんかったが、

「これは、娘がわしらにくれたんじゃろう。」

と納得して、夜明けを待って、大坂に向けて船を進ませたんじゃ。

ほいて、大坂にもんてきて、この黄金を元手にして、由利屋という船具屋を始めたら、たいそう繁盛したそうな。

ほんまかどうか、よう知らんが、この大戦まで大阪に由利屋があったということじゃ。ま、それはそれとして、由利島の長者屋敷の跡あたりに、今も「お船にもうし」という地名が残っちょって、沖行く船をじっと見下ろしちょんじゃと。



由利島の地名（聞き取り調査）

由利島の地名

（囲みの部分あたりが「お船にもうし」）

編集後記　その１

今回も、予定より若干遅れましたが、会報第11号を皆様にお届けでき、ほっとしております。ご寄稿頂いた皆様、編集委員の方々、大変有難うございました。

さて、本年は、理事の二神末次三氏、二神栄三氏が相次いでご逝去されたこともあり、二神系譜研究会の組織にとりましても激動の一年でございました。会員の高齢化が進んで参り、如何にして若い方にも、関心を持って頂き、この会を継続・発展させていくか、大きな課題のひとつであります。

しかしながら、現二神浩三会長は、お元気で、「永久会長」を約束していただいており、そのご好意に甘えさせて頂いております。また、事務局長はじめ常任理事も素晴らしいメンバーで、当分、この「海の民・ふたがみ丸」の運航は大丈夫かなと思っております。

平成20年11月22日の読売新聞の一面の「変わる文化と習慣」に次のような記事が掲載されていました。（ご参考までに）

“「99歳までは、助走、100歳からが本番」。福岡市の社会福祉法人「しいのみ学園」園長、昇地（しょうち）三郎さんは、102歳の今も世界を飛び回る。幼児教育、障害児教育の専門家として招かれ、今年も欧米、アフリカなど12カ国へ。耳は少し遠いが、エレベーターがなければ4階まで階段を上る。

幼少期は虚弱体質だった。心配した母親に言われたのが「30回噛め」だった。

それが、健康と長寿につながった。よく噛むことで、結果として食べる量が少なくなった。「何を食べるかよりも、いかに食べるかが大切なのでしょう」と昇地さんは言う。

よく噛むと、脳の満腹中枢が刺激され、少量の食事で満足でき、摂取カロリーは低くなる。こうした食事が老化防止に及ぼす効果が注目されている。”

皆様よくご存知の「聖路加国際病院理事長」の日野原重明氏（97歳）は、「腹七分」がいいとおっしゃっています。（貝原益軒は、腹八分といいましたが）このように高齢の方が現役で頑張っているのをみますと、私たちも元気をもらいます。

『まだまだ、ガンバラなくっちゃ!!』

平成20年12月21日

副会長　　二神　俊一

編集後記　その２

昨年の今頃、「来年こそは早い段階で会報を作るぞ！」言っていたのに、何ともはや、バタバタの年末になってしまいました。会員の皆さんのご協力、印刷所のご尽力の賜物と深謝するばかり。この2008年、当会としても何人かの方々を見送ることになりました。「想いはいかばかりであったか」と思うと胸が痛みます。残された者が、後をいかにしていくか大事だと思います。

さて、財団法人日本漢字能力検定教会が、その年をイメージする漢字一字の公募をし、今年の漢字ということで毎年12月12日の『漢字の日』に発表しています。平成７年（1995）から始まりました。平成20年（2008）の漢字は『変』でした。

その選定理由として、「日本の首相交代やオバマ次期アメリカ大統領の『チェンジ（変革）』、株価暴落や円高ドル安などの経済の変、食の安全性に対する意識の変化、世界的規模の気象異変による地球温暖化問題の深刻化、スポーツや科学分野での日本人の活躍に表れた時代の変化などの意味が込められ、政治・経済をはじめ、良よくも悪くも変化の多かった一年を象徴する。」とあります。

昨年から遡ってみますと、偽（2007）・命（2006）・愛（2005）・災（2004）・虎（2003）・帰（2002）・戦（2001）・金（2000）・末（1999）・毒（1998）・倒（1997）・食（1996）・震（1995）になります。詳しく紹介はできませんが、いくつか思い当たることがあるかと思います。ちなみに「震」は、阪神・淡路大震災の年でした。

毎年のことながら、来年はどんな年になるのでしょうか。今年に限らず「変化」をしていくことは必要ですが、今まで受け継いできた歴史や文化を「変化」させずにつないでゆくことも大事なことだと痛感しています。

その想いは、二神系譜研究会とて例外ではないと思います。

（2008.12.21　ＴＯＹＯＴＡ）